

第二部

石井式漢字教育のエッセンス

「漢字で教える教育」の原則と実際

第1章 幼児はこうして学ぶ

1. “まねて、慣れて”身に付く言葉

●……赤ちゃんの前だからこそ気を付けよう

“言葉を、数多く、正確に知っていることが、他のどんな特性よりも成功の原因である”ことが、アメリカで実証されたことは、前に述べました。この言葉の教育は、家庭で、生れた時からすぐに始められます。

赤ちゃんは、生れると間もなく、人の声を耳にし、それを聞くことによつて聴力を育てつつ、聞いた声を大脳に一つ一つ録音していきます。それが、やがて赤ちゃんの発する言葉の基礎になるのです。

人間の頭脳は、テープレコーダーのように耳から入る声を録音し、その繰返しの多いものから、これを再生装置に移し、話す能力に換えていくもののように思われます。

バイオリンによる幼児教育で有名な鈴木水鎮一先生は、「音感は生れつきのものではなくて育てるものだ。だから、赤ちゃんの時から、出来るだけ最高の音楽、最高の演奏を聞かせることが大切だ」とおっしゃっています。言葉の教育についても、全くこれと同じように考えなければなりません。

私の知人に、三歳のお子さんのある方がいます。最近にわかにお話が活発になってきて、盛んに両親とお話をするようになったようですが、その中に、ポツンポツンと田舎の言葉やアクセントが出てくるのだそうです。

現在、その知人の家には標準語以外の発音をする人はいないので不思議なようですが、実は、このおписさんは、生後二年ほど、お母さんの実

コラム 部首

僉(僉)

△と口と人の三つの部首から成り立っている部首。旧字体では「僉」だが、新旧とも構造的には違いはない。△は、「集」の意味の部首で、三方から一所に集まることを符号的に示した指事字。

△が原形。「僉」は“人の口を集める”つまり、“人々の意見を集める”ことだと推察できる。

家のおばあさんのそばで育ったのです。つまり、ものも言えないし、歩くことも出来ない頃に録音しておいた田舎訛りを、おしゃべりが出来るようになった今、再生しているわけです。そう考えるよりほかに、その理由が考えられないのです。

つまり、“赤ちゃんの前だから安心だ”ではなくて、“赤ちゃんの前だから気を付けよう”でなければなりません。そして、家庭は、出来るだけ和やかに暮し、きれいな言葉、美しい声で会話をしなければならぬこととなります。

早口でしゃべる親の子供はやはり早口に、乱暴な大声でしゃべる親の子供はやはり乱暴な大声になりがちです。

●……親を手本にして育つ

私は、外から家に電話を掛けた時、電話口に出て応えているのが、家内だと思うと娘だったり、娘だと思うと家内であったりして、つくづく、親子は似ているものだなあ、と感心しています。

普段、肉声で聞くと、親子の音質の違いがよく判って、決して間違えることはないのですが、受話器を通すと、微妙な音質の違いが消えるので、双方が全く同じものに受取れてしまうのです。

私は、この電話での間違いを通じて、普段、親子の違いを聞き分けていたのは、音質よりも、話し方、抑揚の違いであると思っていたことが、誤りであったことを知りました。このように、子供は親の示すものをすべて吸収しているのですから、子供の言葉づかいや話し方が悪いのは、親の示した手本が悪かったためなのです。

【検】 記録（昔は紙がなかったため、木や竹のふだに字が書かれた）によって意見を集約する、“しらべる”という意味の字。

【駿】 たくさんの馬の中から駿馬を選抜すること。毛並みや体格を見ただけではわからないので、駢けさせて“ためし”てみなければならぬ。だから“ためす”が本義。

アメリカの幼児教育研究所で、生後一年二、三か月の赤ちゃんを選んで、毎日十五分くらい、話を聞かせる赤ちゃんのグループと、そういうことをしないグループとを作り、約半年間の結果を調査したところ、毎日定期的な話を聞かせていたグループの赤ちゃんの方が、智能が著しく伸びていた、ということが判りました。

言葉というものが、いかに幼児の頭脳に良い刺激を与え、智能を発達させるか、ということが、この実験でよく判ります。

ですから、まだ言葉を聞取る能力などないと思われるような赤ちゃんに、しきりに話し掛けているお母さんをよく見かけますが、これは大切な教育になっているわけです。この場合、赤ちゃんは返事が出来ないだけで、後日のためにちゃんとそれを録音しているのですから、お母さんは、出来るだけ心を込めて、美しく、優しく、語り掛けることが大切です。

おむつを取換える時にも、ぶつぶつこことを言ったり、なにか怒ったように黙ってしないで、「花子ちゃん、いい子ね」と呼び掛けたり、「花子ちゃん、きれいきれいしましうね」と話し掛ける。これが子供を育てる“言葉の教育”です。

●……学ぶは“まねる”、“習う”は“慣れる”

“まなぶ(学ぶ)”という言葉は、昔は“まねぶ”と言いました。それは、“まね(真似)る”と同じ意味の言葉でした。

幼児は、見るもの聞くもの、すべてを模倣し、模倣することによって、経験を身に付け、これを能力化していきます。そして、言葉の話す能力は、二歳から三歳にかけて著しく伸びますが、この時期の幼児は、人の話す言葉を実に無造作にまねて、それを巧みに使います。“まね”がい

コラム 部首

者

古い形は𠂔(𠂔)で、容器からはみ出るほど“ものがひどく、たくさんある”こと。今は“もの”と“ひどくたくさん”と二つに分かれて使われる。単独で使われるときは“もの”で、部首として使われるときは“たくさん”。

【暑】

日(太陽)と“ひどい”という意味の者との会意形声字。“太陽がひどく照りつける”意味で、“あつい”こと。

【著】

“ひどく草がしげる”意味。今は草に関係なく“ひどい”“いちじるしい”あるいは“目立つ”ことから“あらわす(本を書

つの間にか“本物”になっています。まさに、“学ぶ”とは“まねる”ことです。ですから、教育学者が“模倣期”と名付けているこの時期の言葉環境の善し悪しは、その子の言語能力を決定します。従って、テレビやラジオから流れる音も、幼児たちはすっかり吸収しているのですから、聞かせたほうがいいのか、聞かせないほうがいいのか、聞かせるとしたら、どんな番組にスイッチを入れるか、という難しい問題も当然出てきます。

学習の“学”が“まねる”なら、“習う”は“慣れる”ことです。“慣れる”の古い形は“慣る”で、“ならう”はその変化したものです。

物事を繰返し繰返し、聞いたり、見たりして慣れるのが、“習う”ことです。ですから、“学習”とは、まずお手本の“まね”をして、そのまねたことを反復して“なれる”ことです。幼児は“まねる”こととそれの“繰返し”が大好きです。大人には馬鹿らしく思える“繰返し”が、幼児には面白くてたまらないのです。この性質があるために、幼児は、何でも楽

しんで身に付けることが出来るのです。

物語でも、同じ物語を何回でも聞きたがりです。同じ話では飽きるだろうなどと考えるのは、大人の誤った思いやりです。そんな誤った思いやりから、次々と新しい物語をしたのでは、言葉が身に付かず、しかも、集中力のない、飽きっぽい性質の子供にしてしまいます。

急速に物が豊かになった現在では、いわゆる愛情過多から、玩具なども次々と新しい物を与え過ぎる傾向があります。その結果、“繰返しを好む”という、発育上欠くことの出来ない重大な性格を壊しています。幼児は、繰返しが好きな模倣期には、能力が伸びますが、繰返しを馬鹿らしく思うようになると、途端に伸びが衰えてきます。時期がきて、繰返しの面白さを感じなくなるのは自然ですが、親の誤った愛情から、どこまで伸びるか測り知れない幼児の能力を抑えてしまうことは、非常に残念なことです。

く)にも使われる。
【都】 “ひどくたくさん”という意味の者と㇇との会意形声字。㇇はへんの場合、崖だが、つくりの場合は邑の意味。よって“たくさんの邑を含んだ大きな町”で“その国の主権者の住むみやこのこと。”

●……“同じこと”は同じではない

子供がいつまでも同じことをして楽しんでいると、「いつまでそんなことをしていれば気が済むの」と、軽蔑するような、非難するような言葉を掛ける親があります。

こういう親の言葉からも、飽きっぽい性質が子供の中に作られていきます。親は“同じこと”と言いますが、実は外見が同じに見えるだけで、内容は決して“同じではない”のです。

同じお話を何度聞いても、いや、繰返し聞くたびに、面白さの度合いを増しているのです。同じ本を読む場合にも、二度目には二度目の、三度目には三度目の新しい感動と理解があるのです。

幼児が作っては壊し、作っては壊ししているのは、その間に、対象物のいろいろな反応を確かめているのです。何回繰返ししても同じ結果が出る。

これも幼児にとって驚異であり、発見です。そしてそこに一つの真理を掴む。つまり、幼児はいろいろな物事の性質を究める実験をしているのです。

幼児の伸びていく生命のエネルギーが、この大変な実験に挑んでいるのです。そして、自分もかつてそのようにして現在の大人になっているのだということ、私たちは忘れがちです。しかし、世の大科学者というのは、実は、この幼児の心を失わなかった人でした。それを長く保ち続けて、繰返しに耐えられる人だけが、大科学者になり得たのです。

ですから、次々と変わった物語を聞かせたり、新しい玩具を与えたりすることに努力し、同じことの繰返しに対して眉をしかめたり禁止したりする態度は、「しっかりした人になってくれ」と願いながら、実はその反対の人間に育てているのだと言えましょう。

毎日、喜んで聞く同じお話を、子供がいやと言うまでは、親もまた

コラム 部首

果

◎木で、木の上にくだものなっている形を表した字。“くだもの”が本義。種が芽を出し、木になり花を咲かせ、最後に実を結ぶことから、果は“最後”“はて”の意味。

「果報は寝て待て」の果報は“よい因をな

せば求めなくてもひとりでよい果となりて報いられる”こと。今ではよい因をなすことが忘れられ、果報が単なる“幸運”の意味にとられているのが残念。

心を込めて繰返しましょう。いやいやながらするのでは、いかに繰返しが好きな子供でも、すぐに嫌うようになるでしょう。それは、将来への基礎づくりをしている子供の無意識の努力を、無くしてしまうことになります。

子供は、その全身全霊を傾け、目を輝かせて私たちのお話を聞きまします。私たち大人にとって、これほど尊い聞き手がこの世にあるでしょうか。話し方に上手下手はないと思います。心を込めて、愛情を込めて話しさえずれば、子供は喜んで聞いてくれます。下手なら下手で、話し方の練習をさせてもらうつもりで話したいものです。

なお、こうして同じ話を繰返して聞くことによつて、幼児はおのずから日本語の構造というものを体得します。ですから、読んで聞かせるにも、内容、表現とも、出来るだけしっかりとした文章のものを選ぶことが望ましいのは、言うまでもありません。

●……幼児語は使わない

幼児は、サシスセソをタチツテトまたはチャチチュエチヨに、ラリルレロをダジツデドに発音しがちです。例えば、「お父さん」は「おとーたん」「ラジオ」は「ダジオ」と発音します。これは発音器官が未発達のために起るもので、そのように発音しようとしているではありません。ですから、手本になる親が、子供の発音に同調して「おとーたんと遊ぼうね」などと言うのは全くの見当違いですし、子供の発音器官の発達を遅らせることになります。

総じて幼児語は使わないことです。「おくちゅ」でなく「くつ」、「でんちゃ」でなく「でんしゃ」というふうには、すべて正しい言葉で話し掛け、幼児の録音装置に、あとで訂正を必要とするような吹込みはしないことです。

コラム 部首

未

米で、まだ(米(果)のように大きくならない、つまり“未熟”な果物の形を表した字。
“まだ…ない”という意味。

「未亡人」は“まだ

亡くならない人”という意味で夫を失った婦人が自分を指す謙遜語なので、「○○未亡人」とは本義からすると大変失礼な言い方。

2. 漢字は前進あるのみ

毎日、本を出して読ませることが大切です。一日、一ページから二ページ。一冊を一か月で終えるか、二か月で終えるか、それに従って適当に割当ててください。

一回の指導は、五分から十分くらい。気分転換のつもりで、何かの学習に飽きを感じ出した時に、前に学習した漢字のおさらいなどをしますと、元気をふき返します。

心理学者の実験報告によりますと、学習した事柄を忘れるのは、学習後一時間以内が最も多いそうです。一時間以後は忘れる割合がだんだんと少なくなっていくのです。

だから、学習した漢字を、四、五十分経ってから、つまり、間に何か別の学習、または休み時間をおいて、おさらいをするのが、漢字学習の

上では最も有効な方法です。

一般に、“記憶”の原理は、“関心”と“反復”だと言われていますが、一般的な復習の時期は、

- ① 一時間以内
- ② まる一日後
- ③ 一週間後
- ④ 一か月後

というように、記憶期間がだんだん長くなるのに応じて、間が空いてもよいようになります。しかし、いくら反復しても悪いことはありません。むしろ、反復することにより、必ずそれだけ記憶は強固になるのですから、出来たら、どの学習の時でも常に初めからおさらいすることに努めたいものです。

これまで述べてきたように、文字は、漢字から学ばせることが“絶対

【味】 未熟な果実を待ち遠しく思っ
て“あじをみる”こと。

【妹】 未熟な意味の未に女を加えて、“未熟な女”ということ
で“いもうと”。

に”必要です。実体に即して漢字が存在することを幼児に理解させ、幼児たちが、“文字とは、内容(実体)のあるものを表す符号”であることを、理屈でなく、体で理解させるように努めます。

●……同時に教えない

子供に漢字を与えるのは、植物に肥料を与えるのによく似ています。肥料を施したからと言って、その植物がニョキニョキと伸びてくるわけではありません。

むしろ、肥料を施したことを忘れた頃になって、その肥料が根から吸収され、いつとはなしにその効目が現れてくるものです。

漢字もそのように、「教えた、さあ覚えなさい」というわけにはいきません。教えられた漢字が、いつとはなしに頭に刻まれて、読めるようになるのです。

ある漢字が“読める”“意味が解る”“書ける”と言っても、そこには習熟の程度やその期間によって、いくつもの段階があるのです。習熟を重ねるに従い、期間を経るに従って、その質が向上していくのです。どんなに練習したところで、目に見えてすぐに向上するものではありません。

植物の成長する様を観察しますと、絶えず、ずるずると伸びているのではないことが解ります。ひょこん、ひょこんと伸びるのです。変化しない時期と飛躍する時期とあるのです。もっとも、変化しない時期があると、言っても、それは外から見えないというだけのことであって、内部では、どんな変化をしているか解りません。

幼児が漢字を覚えていく様子も、この植物の成長の仕方によく似ています。覚える時には驚くほどいっぺんにたくさん漢字を覚えます。しかし、ある時期は、覚えるのを休んでいるように見えます。

コラム 部首

非

(𠂇)で、鳥が両翼を開いた形を表したものの。翼が左右反対に向いているというので、“反対”または“否定”。“いけない”“悪い”にも。

【悲】 “心の中でこ

うありたいと願っていることと反対の結果になって悲しい”。

【輩】 “車が押しつけ合うようにぎっしり並んでいる”こと。つまり“多くの車”が本義。今は車に全く関係なく、“多くの人”“仲間”。

覚えるのを休んでいる時には、頭が休んでいるのでしょうか。決して、そう単純には言えないと私は思います。覚えるのを休んでいる時こそ、整理するために、頭が大活躍しているかもしれないのです。

ともあれ、幼児の漢字を覚える仕事は、機械が物を処理する仕方とは本質的に違っている、という事実を認める必要があります。

●……漢字は忘れた頃に覚えられる！

提出した漢字を幼児たちが習得しないうちは、決して次へ進まない、という先生がよくあります。

幼児の、言葉を覚えていったその覚え方をよく考えてみてください。

幼児は常にたくさん言葉を耳にしています。それを、その中からどれということもなしに、いつももなく身に付けていっているのです。一つの

言葉を覚えないうちは、他の言葉は教えない、というやり方で言葉を教えたら、幼児は言葉が使えるようにはとてもなれないだろうと思います。

漢字を幼児に与えたら、それを覚えようと覚えまいと、知ったことじやあない、幼児に漢字を与える、それが仕事で、その仕事が済んだら、あとはお役目放免、先生はそんな気持ちでいなさいというのが「石井方式」です。

教師が漢字を指導したことなど忘れてしまった頃になって、漢字は徐々に幼児の頭に吸収され、貯えられるのです。

「天災は忘れた頃にやって来る」と言いますが、「漢字は、教えたことを忘れた頃に覚えられる」と言えるのではないのでしょうか。

先に聞いた言葉を覚えないうちは、後に聞いた言葉は覚えられない、ということがあり得ないように、一つの漢字が覚えられないうちは、次の漢字が覚えられない、というものでは絶対ありません。

覚えようが覚えまいが、次から次へと、新しい漢字を提出していく、すると、後から提出された漢字のほうを先に覚え、それが前の漢字に関連して、それまで覚えられなかったのに簡単に覚えられた、そういうことがよくあるのです。

「池」が与えられた。覚えられない。次に「海」が与えられた。すると、「池」と「海」がいつべんに覚えられた。……こういうことが、実際には多いのです。

それは、先にも述べましたように、「池」が覚えられない時に、頭が休んでいたわけではなく、記憶作業は進行していたのかもしれませんが、ただそれが外に結果として現れないだけだったのかもしれない。だから、「池」に似た「海」が新しく与えられたことによって、（それが刺激となって）「池」の記憶が完成したのかもしれないのです。

ともあれ、覚えようと思えまいと、ひと所に止まっていることのないよう

にしてください。停滞は禁物です。前進しましょう。

3. 思考の芽ばえを尊重しましょう

●……質問にはうるさがらずに

幼児は、見るもの聞くものにつけて、「これなあに」「あの人だあれ」「ここどこ」と質問を連発します。そしてこの質問の答えによって、知識を身に付けていくのですから、もちろん、正しくていいいに答えてやると同時に、質問しやすいような雪囲気づくりをすることが大切です。

ところが、質問をうるさがると、だんだんしなくなり、知識の増加が止ります。忙しい時でも、明るく応答してやり、答えをもらう楽しさを

コラム 部首

鳥

長い尾のとりの形。

隹は、短い尾の鳥を象った象形字。しかし部首としては、、鳥も隹も同じく一般的ななとあり。鳥は鳴く音で表す漢字が多い。

【鳩】 クークーと鳴く音を表した九と鳥との形声字。「クークー」と鳴く鳥”つまり「はと」のこと。

【鶯鳥】 ガーガーと鳴く音を表した我と鳥との形声字で、「がちょう」のこと。

を、満喫させてやるのが大切です。

「なあに」「だれ」「どこ」という単純な質問から、やがて「どうして」「なぜ」というように、物事の原因や理由を追及する質問をするようになり
ます。

それまで、単純に、別々のものと見ていた物事に対して、これを関係
づけ、結び付けて考えるように成長したためです。幼児の思考能力は、
こうなると著しく向上します。

しかし、この種の質問は、以前の質問と違って、大変に答えにくいもの
があり、説明すればするほど、新しい疑問が出てきますので、往々にし
て親が受け切れなくなります。でも、決してでたらめに答えたり、はぐ
らかしたりすることなく、応答してやりたいものです。

解らない時には、「さあ、お母さんにも解らないわ。お父さんがお帰
りになったら、一緒に聞いてみましょうね」とか、忙しい時には「またあと

でね」とか、とにかく、まじめに応答する態度を示してほしい、と思
います。

●……鳩は鳩、鶴は鶴と教える

たいていの人が、鳩でも鶴でも「鳥」と教え、金魚でも鯉でも「魚」と教
えます。しかし、鳩は鳩、鶴は鶴と教えるべきだと思います。「鳥」とい
名の鳥は存在しません。「鳥」という言葉は、鳩や鶴が解った後にそれを
総合する言葉として教えるべきです。そうでないと、「鳥」や「魚」とい
言葉は、正しく理解できないからです。

一般に幼児は、実物に即した具象的な言葉はそのまま容易に受入れ
ることが出来ますが、実在しない抽象的な言葉は、具体的な実物に結
び付けられない限り、理解することが出来ません。例えば、「お母さん」とい

【鶇】 ケーン（絹のつ
くり部分）と鳥との形
声字で、「ほどとぎす」
のこと。

【鷄】 コケッコウとい
う鳴き声を表す奚と
鳥との形声字で、「に
わとり」のこと。

【鶴】 カッカツとい
う鳴き声を表した雀と
鳥との形声字で「つ
る」。「鶴首」は首を長
くして待ち望むこと。

【鶇】 ピーピーと鳴
く音を表した卑と鳥
との形声字で、「ひよ
どり」のこと。

う言葉は、最初は、実在する自分の母親を表す言葉としてしか理解できません。「友子さんのお母さん」と言えば、「それはお母さんじゃあない。お母さんはこれ」と言っ、自分の母親を指さします。

そういう幼児ですから、抽象的な「鳥」よりも、実在する「鳩」「鶴」の方が理解しやすいのです。

漢字も、やはり、「鳩」「鶴」というような字から教えると容易に覚えます。これらの漢字は、二歳以後なら、どんな子でも必ず理解して読むようになります。学習の難易は、字画には関係ありません。

絵本で、鳩や鶴の絵のところに、これらの漢字を書き入れておけば、子供たちはすぐ覚えてしまいます。

「鳥」というような字は、鳩と鶴の共通点に気付いて、「鳩と鶴には同じところがあるね」と言うようになった時に、①それがトリという字であること、②トリとは、鳩や鶴のように、翼があり、羽毛があり、足が二

本の動物の総称であること、などを教えます。

●……数は使って見せる

今述べたように、抽象的な言葉や文字というものは、幼児の思考力を超えているために理解しにくく、なかなか関心を持ちません。したがって、親の方から一方的に教えても、それに興味を持ってないので、無駄な努力に終わります。数の場合もそうです。お菓子を配る時などを機会に教えるといひでしょう。もっとも、数えるというよりも、使って見せることです。実際に使って見せていれば、だんだんと理解していきます。

“教える”ということは、いろいろな物の実体が解って、そのうち「これは同じ仲間のもの、これは別の仲間のもの」というように、分類したり、同類を集めたりすることが出来て、初めて出来ることですから、一般に考

【雅】 カアカアという鳴き声を表した牙と佳との形声字。“からす”。からすは“反哺”といってエサを取る事ができなくなった親鳥にエサを口移しに食べさせる孝鳥だと言われている。その親子の情愛が“正しく”“ゆかしい”ので、その意味に用いられるようにな

り、からすは「鴉」と書き分けるようになった。【鳴】 鳥と口との会

意字で、“鳥のなく”ことを表した字。転じて“なる”“ならず”という意味にも。

【雀】 “小さい佳”つまり「すずめ」のこと。

えるほど易しいことではありません。

世界的な数学者であった故岡潔先生は、「数は急いで教える必要はない。それよりも、幼児の接する実在や、それを表す言葉を、はっきりと認識させるの方が先だ」と、おっしゃっていました。それが出来なくて、数が理解できるはずがないからでしょう。

幼児の理解は、具象的なものから、具象物を通じて抽象する能力が育ち、自然と抽象的な言葉や文字の理解へと進んでいくものです。説明して解るといえるものではありません。

“易から難へ”ということは教育の当然の手順です。ですから、易しい漢字を先に学習し、覚えにくいかなを後にするのは、その意味で当然のことと言えます。

しかし、それ以上に大切なことは「漢字を先に学ばせる」こと価値です。これはとても大切なことです。

かなを先に覚え、かな書きの本から読み始めた子供と、漢字を先に覚え、漢字かな混り文から読み始めた子供とでは、読書力の育ち方が全く違うからです。

4. 工夫が大切な漢字の与え方

●……絵本や漢字カルタを利用する

漢字を与える材料として、まず絵本があります。絵のところに、その絵に当る語を漢字で書いておくという方法があります。

動物絵本や、乗物絵本などがよいと思います。「犬・猫・馬・牛・猿・熊・象……」「汽車・電車・自動車・自転車・三輪車・飛行機・汽船……」

コラム 豆知識

烏と鴉

「からす」というのは、日本では一般的には、「烏」の方を使っている。

【烏】 鳥より一画

少ない字で頭の中に目がないことを表している字。普通の鳥と違い真黒で、目があっても目が見えないということでこの字が作られた。鳥から目玉が取れたのが烏というわけだ。鳥の中で「からす」だけがこうした独立した字を持つ。

というような漢字が考えられます。

子供が漢字を指して「これなあに」と尋ねてくれれば、教えるのには最も理想的です。しかし、押付けにならないように、「この猫の絵のそばにある字はね、「ねこ」と読む字なのよ」と軽く、話掛けるようなつもりで、付加える程度で十分です。

そうすれば、子供の方から、「じゃあ、犬のそばのこの字は、「いぬ」と読むのね」というように、むしろ自分から進んで発見していくものです。

幼児が、漢字を覚えるための玩具として、「漢字カルタ」というものがあります。犬の絵が表にあると、その裏に「犬」という文字があるものです。

絵本にせよ、漢字カルタにせよ、長い間に、ひとりで覚えるのが理想です。「早く覚えたものは早く忘れやすい」という言葉を思い出して、読めるようになるのを気長に待つことです。

子供は常に背のびし、大人になりたがっているものです。大人のようにしたいのです。ですから、子供が楽しく漢字を読んだ時には、「お母さんと同じように読めるのね」と言って褒めることです。それは、読むことに對する子供の興味を増し、読字力の増大に一層輪をかけます。

●……カードで漢字遊び

幼児の教育は、すべて“遊び”を通して行うのがよしい。漢字教育もまた、それ自身が遊びでなければ成功しません。私が幼い時の記憶では、かなを全部覚えたのは「いろはかるた」でした。カルタ遊びをしているうちに、絵と字とが結び付いて、いつともなく字形まで覚えてしまったものです。

現在では、「漢字カルタ」や「漢字カード」などが出ていて、すでに多く

コラム 豆知識

おじさん

おばさん

小父↓よその男性

小母↓よその女性

叔父↓父母の弟

叔母↓父母の妹

伯父↓父母の兄

伯母↓父母の姉

小さい子供は親戚の人や近所の人など自分の両親以外の大人を、皆「小父さん、小母さん」と呼ぶ。最初に覚えるのは、広い意味の「小父さん、小母さん」がよい。親戚関係が判るようになる、叔父・伯父などの意味の違いを理解していく。

の家庭で利用されています。

“漢字カード”は、一般的に、口・目・耳などの基本漢字、先生・幼稚園などの熟語、歩く・遊ぶなどの動詞、重い・長いなどの形容詞がそれぞれ教十個、その他全部で教百枚一組になっています。表が絵、裏が漢字のカードもあり、いろいろなゲームをして遊ぶうちに、いつか名詞・形容詞等を漢字で覚えてしまうので、文章を読むのにすぐに役立つという効果があります。

本書カバーに「輪郭漢字カード」を付けましたので、試してください。

●……家の中に漢字で名札貼り

幼稚園でよくやっているものに、“名札貼り”があります。実物には、机・黒板・時計・柱・壁・窓・花瓶……など、廊下には「静かに」、「走らな

い」とか「右側を歩く」とか、洗面所には「手を拭く」とか、滑り台には「順序よく」とか、注意を書いた札が貼られています。

こういう幼稚園では、下駄箱の名札は、もちろん、漢字です。かなだとなかなか自分の場所が見付からず、混乱していたものが、漢字に改めたらすぐに見付かるらしく、混乱がなくなりました、ということでした。

家庭では、名札貼りは来客を驚かして、具合が悪いでしょうが、子供部屋があれば、これは出来ます。あるお宅では、お手洗いに、毎日、漢字カードを変えて貼っている、というお話を聞きました。「それほどまでにしなくても」とお考えの方も多いと思いますが、良いこと、役立つことは、工夫して実行してみることが、大切ではないでしょうか。それが成功への鍵ともなるのです。そして、どこまでも必要なことは、親子ともどもに楽しむ雰囲気で行わなければだめだということです。

●……体験を漢字にして示す

「熱い」という字は、「あつい」と読めただけでは、本当にこの字が読めたとは言えません。「冷たい」とどう違うかが解らなければ、読めたことになりません。

こういう漢字の指導は、二本の瓶に、「熱い」「冷たい」という漢字を書いた紙を貼っておき、それぞれ、熱湯と氷水を入れておいて、子供に瓶に触れさせるのです。

子供は、二つの瓶に触れることにより、熱いことの体験と、冷たいことの体験をし、その体験をそれぞれの漢字と結び付けるようになるでしょう。こうして、「熱い」という漢字を見れば、そこに熱湯が入れてなくても、触れて熱かった時の経験が思い出され、その感触がよみがえるようになり、ここで初めて「熱い」という漢字が本当に読めたこととなります。

長い・短い・重い・軽い・太い・細い・広い・狭い・大きい・小さい……こういう漢字も、同様にして、単に発音できるようにするだけではなくて、体験させなければなりません。

例えばマッチ箱を二つ用意して、一つには鉛などの重い物を入れ、これに「重い」と書いておき、もう一つには綿でも入れて、「軽い」と書いておく。「長い」「短い」は、使い古しの二本の割箸を利用してよいでしょう。この場合は、漢字を書いたカードを、糸で箸に結び付けておくのです。

「太い」「細い」「大きい」「小さい」……「丸い」「四角」「三角」「白」「黒」……も同じことです。このようにして教えます。

コラム 部首

責

𠂔と貝の会意形声字。𠂔は束の略字。束は、木にとげの形を表した「」を加えて、「とげのある木」という意味を表した部首で、これに「刀」を加えると「刺(さす)」になる。刺「𠂔」は、部首としては言うことを聞かない

と刺すぞと言って“せめる”ことを表す。責は“貸した金(貝)を返せと言ってせめる”のが本義。

【積】 “責任として納入すべき稲(禾)”。“税として納入すべき米はもみそのまま積まれるので、”つむ”。

5. 読みと書きの教え方

●……その場に応じた読み方だけを

よく尋ねられることですが、「音訓はどう指導するか」ということです。一つの漢字にいくつもの音訓がある。これをすべて教えるのかどうか、という事です。

私の漢字教育では、「一つの漢字にいくつもの音訓(つまり、読み方)がある」とは考えないのです。言葉を基にして、その言葉を表す文字としての漢字を考えるのです。

具体的に言うと、「うし」という言葉に対して「牛」という漢字を教えるのです。だから、「牛」という漢字は「うし」と読めればよいので、他の音訓は教える必要はない、という考えです。また、「ぎゅうにゅう」という言

葉に対して「牛乳」という漢字を教えます。だから、この字を見て、「ぎゅうにゅう」と読めさえすればそれでよいのです。

牛と牛乳と、どちらを先に教えるか。それは、その実際に即して教えるのですから、「牛」が先になることもあれば、「牛乳」が先になることもあつてよいのです。

その実物について、その実物を表す漢字を教えるのですから、どちらから教えようと、幼児にとっては、大した問題ではないのです。牛のほうが牛乳よりも易しいように思われがちですが、「牛」の実物を見ない幼児にとっては、「牛」は「牛乳」よりも決して易しいとは言えません。たびたび言うように、幼児には、目に見えないものを想像することは出来ませんし、頭に描けないものを表す字など、幼児は関心を待つことが出来ないのです。

漢字の使命は、それが何を意味するかを人に伝えることにあります。

【績】 責と糸との会意形声字で糸を「つむぐ」。糸をつむぐ様は、せわしく責めたてているように見えるので「糸を責める」という字になった。

“牛”という字を見たら、即座に、大人ならだれでも知っている動物の牛が思い浮かべられれば、それでよいのです。極端に言えば、“うし”でも、“ぎゅう”でも、よいのです。

“牛乳”の場合は、“牛の乳”と読む字だという説明をせず、そのものずばり、牛乳という実体に即して“牛乳”と教えることです。“牛”だけ見たのでは、何の反応も起らないようによいのです。

“牛乳”の“牛”が“うし”であることを教えるのは、現実の牛（と言っても絵でもよいのです）について、それを表す“牛”という字を覚え、しかも、幼児が「この“牛”は“牛乳”の上の字と同じではないか」という発見、もしくは疑問を発した時です。

それまでは、“牛”と“牛乳”とは、関係なく教えるのが、私たちの基本的な考え方です。幼児は、牛と牛乳との実際的な関係は知らないのですから、初めからこれに関係づけて教えることは無用であり、無理でもありません。

●……音訓を教える時期

幼児は、牛と牛乳との実際的な関係を知らないように、最初は、文字の上でも、両者の共通点に気付かないでしょう。しかし、必ず、いつかは気付くはずで、両者の共通点に気付いた時が、実在である牛と牛乳との関係を教えるのに良い時です。その時「ぎゅうにゅう」が牛の乳であるから、この言葉を表すのに“牛”という字を使って、これを“ぎゅう”と読んでいるのだよ」と教えるのです。

これは、幼児に、発見することの喜びを与えることです。これは学問の方法と喜びを与えることに通じるものですが、単に音訓の知識を授けることは、この発見の喜びを幼児から奪ってしまうこととなります。

コラム 部首

良

古い字形が𠂔で、人と目の会意字。見（𠂔）と反対の形なので、後ろをふりかえって見ている形。“ふりかえる”が本義で、“立ち止まる”意味。

【限】 崖（𠂔）に“立ち止まる”の意味の良と木とで、それ以上進まない、つまり“ここまでとかぎる”。

【根】 “立ち止まる”意味の良と木とで、木がしっかり立っている“もと”である“ね”を表したもの。木の最も大切な部分なので「根本」は“大切なもの”。

そればかりではありません。与えられた知識は失われやすいものです。自ら発見したこと、もしくは疑問に対して教えられた知識は、心に深く刻まれて、なかなか忘れないものです。親は、何でも教えたがりますが、同じ知識でも、授けられたものと、自ら発見したものとは、その働き、その価値の上に大変な違いがあることを知らなければいけません。

それに、教えてもらうという受身の学習ばかりしていますと、意欲のない人間に育ってしまう恐れがあります。その意味からも、出来る限り、子供自身に発見させ、発見する喜びを知らせることが、何事にも意欲をもち、能力のある人間に育てることに通じる道なのです。

●……書きは読みに習熟してから

「漢字を書く指導は、いつ、どのように行うか」もよく尋ねられる問題です。明治以来、漢字教育は「読み書き同時」、並行して学習することになっています。

しかし私は、「読み書き分離」「読みを書きよりも先に学習する」という考え方をとっています。

“読み”と“書き”とは、赤ちゃんの“はいはい”と“あんよ”との関係に似たところがあります。“はいはい”することによって“あんよ”の力が付いていきます。それと同じように、“読み”に習熟すれば、字形の認識が自然に深まり、書きの学習に移った場合、“書き”の学習が容易になります。ですから、“書き”を急がず、まず“読み”の学習を十分にせよ」という考えです。

読み書き同時の学習は、はいはいの出来ない赤ちゃんがあんよをさせられるようなもので、字形についての認識がまだ出来ないのに書かせられるものですから、苦労ばかり多くて、書く力は付きません。今の学校教育では、読み書きを並行して進め、これを同時に完成させようとしています。これはそもそも無理なこと、不可能なことを要求しているのです。しかも、こういう学習を強制していますと、漢字嫌いになって、漢字力は身に付かず、果ては勉強嫌いになってしまう恐れがあります。書きについては、どこの学校でも、書取り練習というのをやらせています。一ページに同じ字を何回も繰返して書かせていますが、書くのに意欲が出ませんから、なかなか書く力は付きません。それに、この書取り練習は、その漢字が初めて出てきたところでやるだけで、あとはさっぱりやりません。これではその時は書けるようになって、しばらくすればすぐ忘れてしまうだけです。

●……表現よりもまず理解を

“読み”とは“理解”することであり、“書き”とは、“表現”することです。“表現”という行為は、十分に“理解”し、身に付いた後に、初めて、それを用いて表現しようという意欲によって起るものです。

十分に理解できないうちに、それを用いて表現しようという意欲など起るはずがありません。その意味でも、“書き”は“読み”の完成の上には始められるべき学習であって、同時に行い、同時に完成を求めるべきものではないことがよく解ると思います。

まして、幼児の生活には、文章を読む生活は考えられますが、“書く”生活は考えられません。“文字表現”をしなければならぬ理由がないのです。

能力を無視した時期尚早の教育は、初めのうちだけ良いように見え

コラム 部首

弋

弋で、土地の境界線をはっきりさせるためにたてた“木の枝”の象形。“目じるし”“標識”(しるし)という意味を持った部首。

【代】 “かわりだとい

うしるしを持った人”。代理人にとつてはしるしが大事なので、弋と人とで“かわり”を表す。

【貸】 “次の世代へおくる財貨(貝)”という意味の会意形声字で、“遺産”が本義。“ただでゆずるお金”から“一時的にただで

ても、発育が早く止り、結局はだめになってしまいます。わが国の作文教育は、明らかにその例だと思えます。内容が充実しないうちから、“表現”活動をさせても成功するはずがないのです。まして、幼稚園で“作文”教育を行っているところがあると聞いていますが、はなはだ見当違いなこと、幼稚園では文字による“表現”よりも文字の“理解”に重点を置いて、知識を吸収し、内容を充実させる学習に努めるべきだと思います。

確かに幼児は、私たちが驚くような文を書くことがあります。しかし、それは、文章よりも、言葉の表現として受止めるべきだと思います。私が、当時三つか四つだった長女と、田舎道を山の方に向かって歩いて行った時、「おや、僕（四つ上の兄の言葉をまねて、そういう習慣がついていた）が歩いて行くと、お山が逃げて行くよ。僕は強いんだなあ」と言ったのです。

そう言われてみると、確かに、こちらが一步進めば向うの山は一步後退するように見えます。しかし、私たち大人は現象を常識的に頭で見、あるがままに見ようとしません。

ですから、私たちは時々子供に教えられます。私は、この時、幼い娘に教えられた、と思いました。このように幼児の作文に、大人を驚かすような表現があっても、少しも不思議はありません。しかし、それは、子供には大人に無い見方があるからであって、作文（文章表現）が優れているわけではありません。

幼児期は、文章表現を伸ばす時期ではなくて、その基礎である“言葉による表現”を伸ばす時期です。そして、大人以上に鋭い、真実を見る目を、さらに育てるべきだと思います。

つまり、“文章作文”ではなくて“口頭作文”を育てる時期です。そもそも文章は、言葉を文字で写したものですから、言葉による表現“口

ゆずる”こと。

【式】 工はIで長さの単位を表した指事字。定規の象形字。“工作”。式は“工作をする時の目じるし”という意味で、“手本”“ひな型”。

頭作文”を磨いておけば、文学力が身に付いた時、それをすぐに“文章表現力”に移行させることが自然に出来ると思います。

第2章 石井方式の発見から確立までの歩み

1. 小学一年生が漢字をバリバリ読んだ

●……一流作家を感動させた一年生

私が漢字教育に取り組んで数年経った頃の話です。

朝日新聞の学芸欄に、作家の故大岡昇平氏が、「入学後、二か月で百字——漢字をばりばり読む小学校」という見出しで、私の学級を全

国に紹介してくださいました。このことから、「石井漢字教室」とか、「石井方式」という言葉が、いっぺんに世間に広まりました。

当時の文部省の学習指導要領では、一年生が一年間に学ぶ漢字は四十六字、そのうち三十字ぐらい覚えられればよい、となっていました。

ところが、私の学級の一年生は、入学して二か月で、百字の漢字を覚えたのです。そして、一年生を終えるまでには、学習指導要領の目標の十倍、三百字の漢字を覚えてしまったのです。

大岡氏が、私の授業を見に来られたのは、三学期の二月でしたから、私の学級の一年生は、事実、三百字ぐらいの漢字を覚えていたと思います。この時も、五、六年生でも習わない漢字がたくさん使ってあって、とてもすらすらとは読めないような文章を、いきなり子供たちに読ませました。ところが、私の学級の一年生は、大岡氏たちの見守る中で、これをバリバリと読んで見せたのです。大岡氏はこの時の様子を、「それは全

コラム 部首

尚

ハ(分ける、開く)と向との会意形声字。向は、家の窓の象形で、尚は、“窓をあけはなつ”ことを表した字。“日光や新鮮な空気が家にはいることを願う”ことで、“希望する”が本義。また音が上(シヨウ)と同じなの

で“うえ”。また転じて“尊ぶ”意味。

【賞】 上(シヨウ)の意味の尚と貝とで、“ほうびとして上の人からたまわる財貨”。

く感動的な光景であった」と書いていらっしやいます。

では次に、その時、一年生の読んだ文章をお目にかけてみましょう。

●……一年生が読んだ文章

「竹男さん、肉屋さんへ行ってね」

と、台所からお母さんが言いました。竹男さんは、「はい」と、返事をしました。けれども、本から目を離しません。

「鳥のひき肉を五十円、買って来て頂戴」

竹男さんは、やっと立ち上りました。そして、お母さんから渡された百円札を、ポケットに入れると、買物袋を持って、急いで出かけて行きました。

●米屋さんの前で、進さんに呼び止められました。

「竹男さん、どこへ行くの」

「肉屋さんへお使用に」

「何だ、お使用いか。走っているから、僕はどうしたのかと思ったよ」

「だって、早く帰って、読みかけの本の続きを読みたいんだもの。さようなら」

竹男さんは、また駆け出して行きました。

肉屋さんの店先には、ハムやソーセージや卵が並んでいました。

「おじさん、五十円下さい」

竹男さんは元気に言いました。

「はい、はい。五十円、何を上げましょうか」

「ええと、何を買うんだっけ。ええと、牛肉ではないし、ハムだったかな。何だったかなあ」

【常】 布の意味の中
と尚との会意形声字。
本義は“スカート”。ス
カートは昔、婦人の普
段着として“つねに”用
いられた。
【堂】 上の意味の尚
と土との会意形声字。
土を高く盛ってその上
に建てた“りっぱな建
物”。

いくら考えても思い出せません。竹男さんは、あまりが悪くなりまし
た。

「家へ帰って、もう一度聞いて来ます」

竹男さんは、あわてて家へ駆け戻りました。

●……中学で学ぶ漢字も読んだ

この文は、当時の小学校の二年生の教科書にあった文です。でも、その
本では、●印の付いている漢字だけが使われていて、その他の漢字は全部
ひらがなで書かれていました。また、○印の付いている漢字は、中学、ま
たは高校になってから学ぶ漢字です。

このように、中学校でも習わない漢字が多く使われた、五、六年生で
も読めない文章を、私の学級の一年生は、バリバリと読んだのでこの程度

に漢字が使われた文章なら、いきなり読ませても、たいていの子供が
平気ですらすらと読みます。事実、大岡氏にお見せした授業は、参観
者が教室に来られてから、

「今日は、これを読むことにします」

と言って、この文章を子供たちに配り、下読みさせないで、いきなり名指
しして読ませたものです。

では、石井学級の一年生は、どのようにして、一年間に、このような
文章が読めるようになったのでしょうか。

コラム 部首

白

親指の象形。“親指”
が本義で、“しろい”は
仮借。しかし太陽の象
形による指事字とも
見られ、太陽光線が
“しろ”なので、親指の
白とは別に作られた
とも考えられる。

【百】 一と白との会
意形声字。昔、親指
一本で“ひゃく”の数を
表したことによる。

2. 漢字はかなよりも易しい

●……一年生にはここから教える

遠足

歩け、

歩け、

元気に歩け。

これが、石井学級の一年生が、入学して一番初めに学んだ文章です。もちろん、教科書は、

えんそく

あるけ、

あるけ、

げんきに あるけ。

となっています。そこで、この上に貼紙をしてかなを隠し、漢字を貼付けさせたのです。

「ひらがなも読めないうちに、こんな難しい漢字を教えるなんて、ずいぶん無茶な話だ」

こんな声が、私の耳には聞えてくるような気がします。

しかし、これは、無茶でも乱暴でもありません。漢字のほうが、かなよりも易しいからなのです。「あるけ、あるけ」よりも、「歩け、歩け」のほうが、一年生の子供には覚えやすく、読みやすいのです。これは、私がそう思うというわけではありません。一年生の子供たちが皆そう言っているのであり、だから、石井学級の一年生は、初めから、言葉を漢字で学んでいるのです。

コラム 部首

令

△と㇇との会意字。

集の本字で、“ひと所に集まる”。㇇は“しるし”。天子が諸侯を召集して授ける“書きつけ”が令。

【命】 ロと令との会意形声字。“口で直接に伝える令”。今は命も令も文書、口答に関係なく使われる。“いのち”(生命)はそれが天の命令であって人力ではどうすることもできないという考え方から。

……石井式は漢字教育の地動説

昔、望遠鏡を発明したガリレオは、地球が太陽の周囲を回っていることを確かめ、地動説を主張しましたが、当時の人々はだれもこれを信じようとはしませんでした。望遠鏡により天体の運動を観察すれば、だれだって地動説の正しいことが解るでしょうが、当時は、地球が動くなどということは、夢にも考えられないことだったので、こんなことは確かめてみようとする人がありませんでした。だから、一旦、地動説は立ち消えとなってしまいました。

「漢字は難しい」——これは、当時の国語教育界における天動説だったと私は思っています。私たちは感覚に頼る限り、大地はじっとしており、太陽が動いている、としか考えられません。かなは易しく、漢字は難しい、というのは、やはり感覚にだけ頼った感じ方です。しかも、科学的に実証しない限り、私たちがこの考えから抜け出せることは、なかなか出来ないもののように思われます。

私は最初、五年間に亘ってこれを科学的に調べてみました。「歩け、歩け」式の学習を三年間、「あるけ、あるけ」式の学習を二年間やってみて、それぞれの学習が、子供たちにとって、どんなに難しいか、また易しいかを、比べてみたのです。すると、この二つのやり方の間には、実に大変な違いがあることが判りました。

「歩け、歩け」式の学習のほうか、比べものにならないくらい易しく学習でき、その上、算数や社会科、理科の学習までが、能率的にぐんぐんとはかどっていったのです。

石井方式は、言わば地動説です。科学的な方法によって発見され、正しいことが証明された方式です。しかし、人々が、感覚にだけ頼って物事を判断する限り、地動説が正しいものとはとても思えないように、

【冷】 冷（凍の本字、こおり）と令との会意形声字。君主の命令は「つめたく厳しい」ので「冷たい」と合わせて「つめたい」を表す。

3. 石井方式はこうして発見した

●……石井方式の発見のキッカケ

終戦直後、私は、高等学校で英語を担当していたことがあります。その時、数人のアメリカ人と親しく交際する機会を持ったのですが、彼らの書く文章に、意外なくらい綴りに誤りのあることを知りました。

やはり、その頃、まだ三つにもならない長男が漢字を読む事実を、私は発見しました。それは、私の読んでいる「国語教育論」という本の「教育」という字を指して、「キョウ、イク」と読んだのです。私はその時、思わず自分の耳を疑ったほど驚きました。

でも、どうして、二歳の子が、「教育」という字を読んだのでしょうか。調べてみますと、その一か月ほど前に、「教育音楽」という本の書名を指

して、しきりに、何かと、妻に尋ねたことがあった、ということが判りました。妻は、その時、なにげなく「キョウイクオンガク」と読んでやったそうです。その字を二歳の子に教えてやったら、それはただそれだけのことであり、その時だけのことだったのです。

しかし、子供は、ただ一回だけの機会で「教育」という字形が、「キョウイク」という音を表す文字であることを覚えたのです。

私はこの時、漢字の字形の複雑さは、漢字を覚えるために、何の妨げにもならないのではないか、ということを直感しました。それと、英語の綴りの複雑さを思い合せて、「日本の国語教育は、間違ったことをしているのではないか」と、ふと思ったのです。「山・川・花・月……」と、「mountain, river, flower, moon……」とを比べてみる時、漢字のほうが難しいと言える理由が、一体どこにあるだろうか。彼らが、一年生から「mountain, river……」を学んでいるなら、わが国でも、一年生が「山・川

【敵】 的の意味の商
と欠との会意形声字。
目標とする相手に向
かって武器を取るこ
と。“目指す相手”。“戦
いの相手”。自分と対
等に戦える“良い相
手”の意味。

……」を学んでよいのではなからうか。……こんな疑問が湧いたのです。

●……第一原則発見

昭和二十六年、当時私の住んでいた東京都八王子市に、教育委員会が生れ、私は、その指導室に、主事として勤務することを命ぜられました。市内にある高校・中学・小学校を訪問して、授業を見、先生方を指導し、助言を与えるのが仕事です。

こうして、私は、初めて小学校教育の実際を、自分の目で見る事が出来るようになったのです。そこで私が、小学校の先生方から訴えられた悩みというのは、「子供たちの漢字の力が弱いこと」、そのため、「社会科や理科の学習さえ満足に出来ないこと」「これを解決するために、うまい漢字の指導法はないだろうか」ということでした。

そこで、先生方のこの悩みを解決しようと、考えた末の案が、今、石井方式の「第一基本原則」となっている、「社会で、一般に漢字で書いている言葉は、最初から漢字で書いて教えるべきである」という考えだったのです。私は、この考えを多くの先生方に訴え、あるいは、勧めてみました。しかし、先生方には、この考えは机上の空論としか考えられなかったようでした。だれ一人として、実行してみようと申し出てくれる先生はいませんでした。

●……発奮して小学校教師となる

確かに私の考えは、机上の論でした。頭の中で考え出したものです。それに私は、実際に小学生を指導した経験がありません。それで、自分の考えが正しいと信じる私は、小学校の教師になり、実際に子供を指

コラム 部首

翟

隹（鳥）と羽との会意字で、“羽の美しい鳥”が本義。部首として“きらきらと美しく輝く”“羽をばたばたさせる”こと。

【曜】 美しい意味の

翟と日との会意形声字。“日の光がきらきらと美しく輝く”。日曜・月曜などの曜は“空に輝く天体”で、太陽、月、火星……土星などを表す。

導して、その正しいことを証明しようと考えようになりました。

新しい学年を迎えると、私は、せつせと市内の小学校の一年生の教室を見て回りました。指導主事ではなくて、指導され主事になったのです。こうして私は、一年生を担当する準備を始めたのです。

帰宅すると、ピアノの練習も始めました。これは一年生の担任として、絶対に必要な技術なのですから……。幼稚園に通う長男と、二歳になる長女と、バイエルの練習を一緒に始めましたが、いくら頑張っても、子供たちにだんだんと引き離されていく悲しさを、しみじみと味わったこともありました。

翌年、わが子の小学校入学とともに、私は、新宿区の淀橋第一小学校の教師となり、待望の一年生を受持つことになりました。

4. 予想を上回る「歩け方式」の成果

●……初めて一年生を教える

学校で一年生を受持ち、帰宅しては一年生のわが子と語る……。これなら、一年生を受持った経験のない私にも、なんとか人様の子供を預かって、教育することが出来るのではないか、という考えでした。確かに、これは良い考えだったと思っています。大した間違いもしでかさずに、曲りなりにも勤めて、子供たちの両親から感謝されるくらいに子供たちを教育し、三年生を終えるまで受持つことが出来たのは、何よりもこのお蔭ではなかったかと思っています。

しかし、それにしても、一年生を受持つということは、なんと大変な仕事でしょう。五十人が五十人、皆違った性格を持っている子供たちが、

コラム 部首

己

曲りくねった糸の象形。糸の先端を表していることから「はじめ」。「紀」の本字。「自己」などと使われているが、これは仮借。

【紀】己が「おのれ」

の意味で使われるようになったため、「糸の先端」を表す糸と己の会意形声字。

【記】糸すじの意味の己と言との会意形声字。「言葉を糸のように長く続ける」。言葉を整理し順序立てて、「書き記す」こと。

それぞれ違った行動を思い思いに始めると、さあ大変。最初の一週間というものは、まったく途方に暮れたものでした。

その上、学校が戦災に遭い、教室が足りないために二部授業をする、という不利もあって、午後から勉強を始める日など、遊び疲れてから学校にやって来る子供たちを教えることは、なかなか大変なことでした。

しかし、それでも、五月、六月と、月日の経つにつれて、子供たちも成長し、また、私も指導のコツが解って、学習もすらすらと進むようになりました。

●……目標の七倍に成功

私は、初め、一年生を終えるまでに、およそ二百字の漢字を教えて、そのうち、百五十字ぐらい覚えさせたい、と考えていました。

ところが、二学期の終りから三学期にかけて、子供たちの学習はほとんど拍子に進みましたので、初めの予想を大きく上回って、教えた漢字は三百字を超え、覚えた漢字も、二百字を超えていました。

一番良かった子は、教えた漢字三百二十七字のうち三百五字を覚え、一番悪かった子でも、六十三字覚えました。クラスの平均は二百三字。つまり、当時の学習指導要領での目標である三十字の、およそ七倍に近い漢字を覚えたわけです。何よりも嬉しかったことは、一番成績の悪かった子供でも、文部省（現文部科学省）の目標の二倍を超えていたことです。

この子供たちが三年生になった時には、子供たちの使っているノートや作文を見た先生たちは、異口同音に、「六年生もとても敵いません」と言って、褒めてくれるほどになりました。

●……あらゆる実験を試みる

このすばらしい結果は、「漢字が易しい文字であること」、少なくとも「一年生にとって、漢字は難しい文字ではないこと」を証明したものであり、「歩け」式指導方式が正しかったために、この良い成績が得られたことを、私は確信することが出来ました。

私は、自分が正規の小学校教師としての教育を受けておらず、そのため、指導技術も未熟であることを、十分に自覚していました。ですから、普通の先生方がこのやり方で教えたら、もっともっとすばらしい成績が納められるだろうと、確信していました。

ところが、先生方はそうは考えてくれなかったのです。「元指導主事の石井先生がやったから、成績が良かったのだ。一般にだれでもやれるという方法ではないのだ」

こういう声が、私の耳に聞こえてくるのです。しかも、こういう批判があまりにも強かったので、つい私も、「自分の指導技術はうまいのかもしれない」などというぬげれ心も出て来て、

「このすばらしい成績が、すべて、『歩け』式指導方式による結果である」と言い切る自信が、少しぐらついてきました。

「よし、もう一度一年生から、今度は、『あるけ』式指導方式でやってみよう。そうすれば、『歩け』式と『あるけ』式と、どちらがどれだけ勝れているかが、はっきりと判るだろう。そこまで確かめてみなければ、実験としては不完全なものだ」

こう考えた私は、再び一年生を受持とうと決心しました。

5. 「かな書き」方式にはこんな欠陥がある

●……かな書き方式の失敗

初めて一年生の担任になって三年後、私は再び一年生を受持ちました。今度は、三年間の指導経験を積んでいるので、一年生の扱い方もよく解り、自信をもって子供たちを導くことが出来ました。それに、前回よりも幸いだったことは、校舎が増築され、二部授業がなくなったことでした。授業時間数も、前回に比べると、二倍近く増えました。条件は、あらゆる点で、前回より良くなっていました。しかし、結果は逆に悪かったのです。

それは、漢字の覚え方が悪かったというだけのことではありませんでした。もちろん、覚えた漢字の数も少なかったのですが、それよりな

より驚いたことは、「あるけ」式指導法には、今までだれも気が付かなかった、致命的な欠陥があったということです。

私が指導主事をしていた頃、先生方から、

「テストすれば書ける漢字が、作文にはなかなか使われない。これはなぜだろうか。また、この指導はどうしたら良いだろうか」という相談をよく受けたものです。私は、この原因は、

「漢字は画数が多くて、書くのに面倒だから、知っていてもわざと使わないのだろう」

くらいに考え、そう答えていました。しかし、事實はそうではなかったのです。

なぜかと言いますと、「歩け」式時には子供たちは、一度習った漢字は、作文の時はもちろん、どんな学科の学習の時にも、必ずこれを使って書いたのです。忘れてしまっただけで書けない時には、必ず質問して教えても

コラム 部首

喬

天と高との合字。天は足で、頭の曲った人の象形。従って喬は、高くそびえて、上の方の曲っていることを表した部首。

【橋】 真ん中が高

く、そり返った形（アーチ形）の“たいこ橋”が本義。力学的に丈夫なので昔からこの形の橋が多い。今では形と材料に関係なく使われる。

【高】 倉で、高い建物の象形により“たかい”ことを表した指事字。

らい、かな書きすることは、決してなかったのです。

それは、「橋・箸・端」というように、発音に関係なく、言葉には決った一つの書き方があって、そう書かなければならないものと、子供たちが皆そう考えていたためだと思います。極端に言えば、「橋・箸・端」を「はし」という書き方をしたのでは意味の区別が付かないように、「山は、『やま』と書いたのでは、山の意味を表すことは出来ない」と、子供たちは考えていたのではないかと、思うように思われました。

だから、まだ教わらない言葉を使う時でも、それをかなで書いて済ませる、ということを経ずに、どう書くか、ということを経ず尋ねたものです。

漢字の本当の力は、使うことによって付くものです。「歩け」式指導方式が、すばらしい成果を上げたのは、このためだと思います。また、文部省（現文部科学省）の目標の七倍もの漢字を覚えたということは、大変

なことなのですが、よく考えてみれば、実に当り前のことだったので

「歩け」式では、言葉を、言葉の持つ意味をしっかりと押さえてから、それを書かなければなりません。これは、ちょっと考えてみますと、大変なことのように思われますが、書くという仕事には、それだけの注意は絶対に必要なものなのです。これを怠っていたのでは、本当の国語の力、物事を考える力は付かないのです。しかも、それは、最初に注意しさえすれば、すぐにその習慣が付きますので、心配するほど大変なことでは決してありません。

●……能力より習慣が問題

漢字の力は、ある意味では、習慣の問題で、能力の問題ではありません。

コラム 部首

半

“物”という意味の牛と八（分かつという意味の部首）との会意形声字。“物を真二つに分ける”こと。

【判】 “リ（かたな）

で切って半分にする”こと。昔、証書の類は二つに切ってその一つをそれぞれが保管し、二つが合うのを証拠とした。“真偽を判別する”という意味の“わか”こと。

よく知っている漢字でも、使わないでいれば、そのうちにこれを忘れてしまうでしょう。それにひきかえ、漢字を知らなくても、教わってでも漢字を使って書こうとする子供は、必ずその漢字を覚えることが出来ます。

漢字の力は、どんな能力のある子供でも、漢字を使って書こうとする習慣がなければ、絶対に付きません。これに反して、どんなに能力の低い子供でも、漢字を使って書こうとする習慣があれば、その力は必ず付くものです。

「歩け」式学習方式は、だれでも、漢字を使って書く習慣を、きつと付けることの出来る方式です。この方式で勉強する子供たちは、

「漢字を使って書きなさい」

などという注意を受けなくても、必ず漢字を使って書くからです。

「あるけ」式学習方式では、先生が、どんなに口をすっぱくして、

「漢字を使って書きなさい」

と注意しても、子供には、漢字を使って書こうという習慣は付きません。

私が先ほど、「あるけ」式学習方式には、致命的な欠陥がある、と言ったのは、これなのです。今まで、どこの学校の、どの先生でも、

「子供たちは、知っている漢字を使わない」

と嘆いています。その理由は、漢字の字形が複雑だからだ、と思っています。ですから、これはどうにもならない、いわば宿命的なもの、という風に諦めてしまっています。

私も、「歩け」式と「あるけ」式と、この二つの方式をやってみるまでは、やはりそう思っていました。けれども、「歩け」式をやり、その上、「あるけ」式をやってみて、その結果があまりにも違うので、本当の理由が解ったのです。

……簡単でない正しい使い方指導

私の指導主事時代、先生方から相談を受けた問題に、もう一つ、『火と（人）が木（来）ました』というような書き方をする子供が非常に多いが、これをどのように導いたら良いのか」という問題がありました。これも、どこの学校の、どの先生もが嘆いている問題です。

この誤りの起る理由は、「漢字を、言葉として理解しないためである」と、一般に考えられています。ですから、「火」は、単なる「ひ」という音を表す字ではない。「燃えるひ」を表す字であって、「朝日」という場合は使えない字である、ということをよく理解させればよい……。このように考えられていました。指導主事時代の私は、いつもそのように答えておりました。

しかし、問題は、そんなに簡単なものではなかったのです。教師のそういう注意だけで、子供たちは、正しい漢字の使い方が出来るようになるものではありません。

これもやっぱり、根本的には、「あるけ」方式の生み出した欠陥だったのです。「歩け」方式の時には、何の注意を与えないでも、こんな誤った使い方をする子供は、全然ありませんでした。ところが「あるけ」方式では、
 ・「火は燃えるひで、それ以外には使えない字ですよ」
 ・と、どんなにいいねいに教えても、一、二割の子供はやはり、間違った使い方をするのです。

コラム 部首

毎

マ（艸 艸 艸）と母との会意形声字。母なる大地の恵みを受けて「草が生い茂る」こと。転じて物事の「重なる」「重ねる」意味。

【海】 晦冥（かいめ

い）（日）が草に隠れて「くらい」の意味の毎と水との会意形声字。

“海は深くて暗い”ので「溟」とも。

【悔】 晦冥（かいめ

い）の毎と心との会意形声字。ああ残念なことをしたと、うらめしく思っ心がかぐらひ”こと。

●……初めから漢字で学べば間違えない

両者の結果がこうも違ってきましたと、原因は、やっぱり「歩け」方式と「あるけ」方式そのものの違いにあると考えないわけにはいかなくなりま
す。そこでよくよく考えてみますと、やっぱり、ありました。実際にはつき
りとした理由があったのです。

「歩け」方式では、「火・日・人……」言葉の一つ一つに当って、その言葉
固有の書き表し方を学んでいきます。子供たちは、一番初めから、そう
いう書き方をちゃんと学んで、文字というものはそういうものだというこ
とを、最初から理解してしまいます。しかも、「火・日・人……」など、す
べての言葉を、初めから漢字で学んで知っているのですから、間違っ
て使
う、というわけがありません。

ところが、「あるけ」方式では、初めは、どんな言葉でも、かなで学習
します。だから、子供たちは、なんでもかな書きする習慣が、出来上っ
てしまっています。

それでいて、次に、「木」という字を学ぶと、「うえ木(植え木)」「つみ木
(積み木)」と書かなければなりません。けれども「てん木(天気)」「木し
ゃ(汽車)」と書かなければいけないのか、それともそう書いてはいけない
のか、ということになると、一年生の子供たちには、この区別はなかなか
付かないのです。

子供たちは、「つみき」と書いて、「つみ木」と先生に直されます。そこで
今度は、「きしゃ」と書かないで、「木しゃ」と書きます。すると、今度は、
「きしゃ」と直されます。頭の良い子には、どうして直されたか解るかも
しれません。けれども、普通の一年生の子供には、これではどうしたら
よいのか、迷ってしまうのが当たり前です。

私は「あるけ」方式をやってみて、教わった漢字を正しく使うというこ

コラム 部首

青

青が本字で、生と丹
の合字。丹石から赤
色の染料をとるが、同
時に青もとれるので、
あかを丹といい、あお
を“丹より生ずる”と
いう意味で“青”とし、
発音は、“生ずる”のセ
イを取った。あかとあ
おは色の基本なので、

絵の具や絵のことを
「丹青」と呼ぶ。

【清】 水の青くすき
とおって見える状態の
こと。

【晴】 青空と日とで
“はれ”の意味“すぐれ
た状態”なので、“青”
は“すぐれて良い”とい
う意味を持つようにな
った。

とが、一年生にとってはどんなに難しいことか、初めてよく解りました。これでは一年生はかわいそうです。実に難しい、それでいてちっとも効きめのない勉強を、子供たちはやらされているのです。

●……外国の教え方に学べ

こうして私は、「やっぱり『歩け』方式でなければいけない」と思いました。「積み木、天気、汽車……」初めから、こういう形で教えてさえいれば、「てん木」とか、「木しゃ」とかと書く子は出て来ないのです。

英語でも、初めから、「night, knight, write, right」と、区別して教えています。「nait, rait」とは教えません。これは、世界中、どこの国でもやっている文字の教え方の正道です。ただ日本だけが、初めに正しい書き方を教えないで、子供用の(にせの)書き方を教えているのです。「人のふり見て、

わがふり直せ」という諺があります。しかし、それが正しいやり方であるなら、外国でどうやっていようと、自信を待って、独りわが道を歩いて行くべきです。しかし、わが国の今のやり方は、わが国だけのものではない、しかも、どうも間違っているようです。いや、私の実験は、はっきりと間違っていることを証明しています。

6. 『かな』はどう教えたらよいか

小学校に進むまでには、かなも一通り読めるようにしてやる必要があります。今の小学校では、かなが一文字も読めないような状態で就学したら、一学期の学習は大変苦しいものになります。

かなは表音文字ですから、石井方式では、その本質に叶った使い方で、

【情】 心のすぐれた状態。
 【静】 争いを“しずめる”ことから、“動かない”“しずか”。

これを学習させます。

「お爺さんは、山へ柴刈りに行きました」のところで、

- 行かないよ
- 行きました
- 行くこと
- 行けばよい
- 行こうよ

という変化を通じて、「かきくけこ」を学習させるのです。私は指導主事をしていた時、小学生が「行」は「い」という字だと答えているのを聞いて驚いたことがあります。そういう教え方をしている先生が多いのです。

「行」は「いく」という言葉を表した漢字だ」と教えなくてはいけません。ただ、この言葉は、「牛」「馬」と違って、「いか」と読んだり「いき」と読んだりするので、変化する「かきくけこ」を付け加えるのだ、ということ

を理解させるのです。

もし「行ないよ」と「か」が抜けていたら、「いかないよ」と読んで、「いないよ」などと読まないように教えなければいけません。今の中学校でも、「行ないよ」を「いないよ」と読む生徒がかなりあるのではないのでしょうか。

第3章 “漢字で教える” 石井式の学習原則

1. 小学校から幼稚園へ

こうした新しい石井式漢字教育の作戦を考案し、計画し、実践してくださったのが、大阪市の小路幼稚園の井上文克園長でした。

井上先生は私の著書を読まれてすぐ、取る物も取りあえずという形で上京し、私の家を訪ねてくれたのです。その時先生は、「石井方式の普及、日本の教育の改革は、まず幼稚園から手を付けるべきではないか。幼稚園は、それには最も適した場である。私にお任せください」とおっしゃったのです。

その後、大阪で準備された会にたびたび出席して、多くの園長先生に石井式漢字教育の実践について話したり、奨めたりすることになりました。

「幼児が漢字を覚える？ 本当だろうか。本当だとしても、それは一部の幼児に過ぎないのではないか——そういう考えの園長が多かったと思います。しかし、私と井上先生の熱意が通ってか、実践に踏み切る幼稚園がどんどん増えていき、たちまち、数十の幼稚園がこの教育を力強く推し進めてくれるようになったのです。

2. 幼稚園で行った漢字教育の実際

大阪市を中心とするいくつかの幼稚園によって始められた“石井方式による漢字教育”は、今では、数多くの幼稚園や保育園によって実施されています。

コラム 部首

易

易の変形。意味は日にある。日の光のふり注ぐありさまを表した。

【湯】

“日光であたためた水”ということ。で“日なた水”が本義。

【場】

“日当りの良い土地”が本義。今単に“土地”“ところ”をいう。

当初は、「かな文字を学習させるのもまだ早い」という意見さえある幼稚園教育に、漢字を学習させるとは何事か。乱暴もはなはだしい」という声が盛んでした。

ある幼稚園の園長さんは、顔色を変えて、「私は、幼稚園で、かなを学習させるということにも反対意見を持っているものです。まして、漢字を幼児に学習させるなどということは、とんでもない暴挙で、絶対に許せないことだと思います」と、私に食ってかかりました。

「そ、うおっしゃるのは、まことにごもっともなことだと思います。実は、私も先生と同じ意見で、今、多くの幼稚園が行っているようなかな文字教育は早過ぎる」という考え方をしています。

それはさておき、まあ一つ、私にだまされたと思って、二十分ほどよろしい。園児を私に貸してください。私の“漢字教育”というものを、実際にお目にかけてみたいと思います。指導の実際をご覧ください上で、

良い悪いのご意見をおっしゃっていただきたいと思ひます」
と私は答えました。

そこで、その幼稚園の園児たちを、四歳児と五歳児と合せて四クラスほど、いっぺんに講堂に集めてもらい、“漢字教育”を始めました。

私の言う“漢字教育”とは、こういうことなのです。

子供たちに向って、「これから、先生は、皆さんに面白いお話をします」と言つて、おとぎ話を始めます。

その時、お話をしながら、その話の中に出てくる、主な“人物”や“動物”“品物”“事柄”などを、漢字で黒板に書付けていきます。お話は、十分か十五分くらいで終ります。その間に黒板に書付けられる漢字は、全部でおよそ三十字くらい。それで黒板は漢字で一杯になります。

話に先立って、「漢字を書きます」とも「漢字を教えます」とも言いません。ただ話をしながら、さり気なく漢字を書付けていくのです。

コラム 部首

冂

柵の上に人の頭の見える様子。柵の様子を見に柵にそって“まわる”が本義。

【用】 牧場に張り巡

らした柵の象形。“張り巡らす”のが本義。柵は牧場になくてもならぬものなので、“必要”“役に立つ”“使う”

の意味が生れた。

【勇】 冂と力との会

意形声字。“湧き出る力”という意味の字で、泉の湧き出るように自然と心の中にみなぎってくる力が「勇氣」。

黒板に書付ける漢字は、お話の中にたびたび繰返されて出てくる言葉を選びます。そして、その言葉が出てくるたびに、その言葉を使う時に、その言葉に当る漢字を指さします。これも、やはりさり気なく、自然に行います。

この時、幼児たちは、話を聞こうと、私のほうに心も目も集中させていますので、私の手の動きに従って、自然と指さす漢字に目をやります。ただこれだけのことで、子供たちは、黒板の漢字を、話される言葉と結びつけ、「猿」という漢字は「さる」と読むのだなと理解し、覚えてしまうのです。

これは、実際を見たことのない人には、まず信じていただけないことだと思います。お話が終って、さて、黒板に書き並べられてある漢字を、一字一字、子供たちに尋ねます。すると、子供たちは、「そんな漢字はとくの昔に覚えているよ」と言わんばかりの顔をして、すらすらと、読んではしまいます。

黒板一杯に書付けられた漢字を全部、間違いなく読みます。順序を変えて、どの漢字を指さしてみても、ためらわずに正しく読むのです。

念のために申し上げますが、私は、子供たちに、ただ、「お話をしながら」とも、お話をしたただけであって、決して「漢字を教えます」とも、まして、「漢字を書くからこれを覚えなさい」などとは絶対に言いませんでした。

ただお話をしながら、黒板に漢字を書付けていっただけで、いわゆる“漢字指導”というようなことは、決していたしません。それにもかかわらず、幼児たちは、黒板に書付けられた漢字が、何と読む字であるかを、覚えてしまうのです。

この時も、園児たちは、どの漢字も元氣よくすらすらと読んでいきました。黒板に一杯書付けられた、三十字ほどもある漢字を、どれを指

【通】 柵にそって道
 を行き来するのが本
 義。柵があつて安心し
 ておれるので、“物
 事がうまく行われる”
 の意味。

さしてみても、皆、少しのためらいもなく元気に読みました。

私は、その間、時々園長さんの顔をうかがいました。すると、きらきらと輝く園長さんの目が、漢字をすらすらと読んでいく子供たちの姿に痛いほど強く注がれていて、息を殺し、身動きもしないでご覧になっている様子が、私の目に映りました。

さて、指導が終って、私が園長室の椅子に坐った時、開口一番、園長さんの口を突いて出てきた言葉は、「石井先生。私の幼稚園でも、この漢字教育をぜひやらせていただきます」という言葉でした。

その言葉や態度には、ほんの一時間ほど前の、非難を露骨に表したそれとは打って違って、心からこの教育を推進してみたいという、熱意と意欲が満ち溢れていました。

それから、「幼児の漢字を覚える能力が、こんなにすばらしいものであるうとは、今の今まで全く考えてもみませんでした。本当に夢でも見るような気持ちです」。園長さんはしみじみとした調子でそう語りました。

●……漢字を見せるだけでよい

そこで、私は、次のようなお話をいたしました。

「石井方式による“漢字教育”とは、“漢字を教える教育”ではありません。漢字で教える教育”なのです。

たった今ご覧になったように、お話の中に出てくる言葉を、ただ漢字で書いて見せるだけの教育です。“漢字を教えよう”“漢字を覚えさせよう”などと思わずに、ただ漢字を見せるだけでよいのです。

だから、漢字について、何の説明をする必要もありません。従って、“漢字指導”などと、特別に取立てて準備することは、何もありません。

コラム 部首

俞

△と舟と川の合字。

現在の「月」の部首には「月」のほかに「肉」の変形したもの（にくづき）と「舟」の変形したもの（舟）とある。「川に舟がたくさん集まっている」ことを表したのが俞。“舟で物を運ぶ”のが本義。

【輸】 “車で物を運ぶ”という意味で、舟

で物を運ぶ意味の俞に車を加えて作られた。

【愉】 “人の心を望む所に運ぶ”という意味。従って“気持がよい”“たのしい”こと。

“石井方式・漢字教育”という名前は、石井方式を知らない人が勝手にそう呼んだもので、本当は、“漢字教育”というほどのものではありません。ただ、今では、そう呼ばないと通じないので、私も仕方なしにそう名乗っているのです。

ともあれ、“石井方式・漢字教育”は、ただ漢字を見せるだけの教育であって、漢字を教える教育ではありませんから、指導のために、何の知識も技術もいりません。どなたでも、やろうとさえ思えば、今すぐにも出来るものなのです。」

子供たちは、私の話を聞きながら、漢字をただ見ているだけで、いつとはなしにそれを記憶に留めていくのです。この漢字は何と読む漢字と教えられたわけでもないのに、あの漢字はこう読む漢字などと、話を聞きながらひとりで理解し、記憶してしまうのです。

幼児は、出会うものは何でも、皆覚えずにはいられない、……そう言いたいほど、強烈的な記憶力を持っているのです。幼児期の子供というものは、すべて、そういうすばらしい能力をもっているのです。

ですから、幼児たちは、努力して漢字を覚えているわけではありません。幼児たちの心には、「漢字を覚えなければならぬ」という気持はないのです。「覚えようとも思わないのに、ひとりで覚えてしまった」幼児の記憶の仕方は、そのような“無努力の記憶”だと言うことが出来ます。努力して覚えるのではないから、少しも苦勞はありません。従って、幼児の記憶の仕方は、“無負担の記憶”だと言うことも出来ます。いや、それ以上に、“楽しんでする記憶”だ、と言うべきでしょう。

●……………“**関心**”は**記憶**につながる

“記憶”の原理は“関心”の一語に尽きると思います。記憶力の旺盛な

【癒】 病氣を向こう岸に渡すという意味の愈と瘡とで、病氣の“なおる”こと。癒と同じ。

幼児たちは、関心を持って見るものは、すべて記憶に留めずにはおきません。

私は、子供たちに「漢字を覚えなさい」とは言いませんでしたが、お話の間に、黒板に書付けられる漢字に、関心が抱かれたので、子供たちはこれを覚えてしまったのです。

ところで、子供たちは、漢字を覚えることによって何か失うものがあるでしょうか。“無努力”“無負担”で覚える子供たちは、漢字を覚えることによって失われるものは、何もないはずですが、それは、川の水を発電に利用していますが、電気を起したからといって、水は何も失うものがないのと同じです。

電気を起したただけ完全なプラスであるように、お話を聞きながら漢字を覚えることは、漢字を覚えただけ、完全にプラスになるわけです。

この漢字教育によって失われるものが何もなく、漢字を覚えただけプラス……しかし、本当はそれだけのものではありません。いわゆる“六領域”にわたる幼児の教育指導を、漢字で指導することによって、それまでの以上の教育効果が各領域で得られる。そこに石井方式の価値があるのです。

「石井方式で漢字が覚えられたとしても、六領域にわたる幼児の活動が犠牲にされたのでは何にもならない」と言って、石井方式を非難する人がいますが、これは石井方式の実際を知らない、全く的外れた非難です。

子供たちにお話を聞かせるのに、ただ耳だけに訴えて聞かせるよりも、漢字を見せながら聞かせたほうが、ずっと子供の注意を集めることが出来ることは、先刻の事実が何よりも証明していると思います。

私はそう言って、後で述べるような“歌の指導”や“絵の指導”の实例を挙げて、園長先生に説明しました。そして、「石井方式・漢字教育」と

コラム 部首

萁

萁(莖)は黄と土との合字。中国の黄河の上流には広大な黄土層がある。黄土は、質は至って細かく、粘って扱いにくい土なので、この黄土で“細かい”“扱いにくい”を表した。

【難】 萁という鳥

(萁)の名が本義。手に入れるのが大変に“難しい”鳥なので難(扱いにくい鳥)と名付けた。

【勤】 “きめ細かに

心を働かしてつとめる”。力は努力の力で“つとめる”ことを表す部首。

いうものは、このように良いことづくめで、しかも、指導する先生にも、指導を受ける子供たちにも、少しの負担もかからない学習法です」と言つて、この長い説明を結びました。

こうして、初め猛烈に反対していた園長さんは、幼児の実際の活動を通して、その真実の姿を自分の目で確かに見届けますと、一転して“漢字教育”の賛同者となり、熱心な実践者となったのです。

●……石井方式を“食べて”もらう

「幼児に漢字を教える」と言えば、従来の常識からして、とんでもないことだと思ふのが、むしろ当然だと思ひます。

私の主張は、長い実験に基づいて得られた結論であり、必ず世に受入れられなければならない真理ではありますが、すぐに世の人々が共鳴

してくれるとは、初めから期待しておりませんでした。

どんな真理でも、それまで長い期間に亘つて、人々の頭を支配して来た考え方を変えるためには、常に、驚くほど長い年月がかかっているからです。

人間は、過去の“常識”という固定観念に縛られているため、新しい真理を真理と認めることは、なかなか出来ないものです。“常識”という色眼鏡を通して見ますから、本当の色が判らないのです。その上に、人間というものは、自分で実験し、自分の目で確かめてみれば容易に判ることでも、物ぐさで、なかなか実験しないものですから、食べてみようともしない人に、その食べ物の味を教えようとするようなもので、真理を理解させることの困難さは不可能に近いものがあります。

新しい食べ物の味を知ってもらうためには、どうしてもそれを実際に食べてもらう必要があります。食べてみさえすれば、ともかくも味が判

ります。味の良い悪いを言うことが出来ます。世の中には、食べてみもしないで、やれそれは味が悪いのなんのと、無責任に味を論ずる人が何と多いことでしょう。

私は、石井方式の良い悪いを論じてもらう前に、つまり、石井方式の味を論ずる前に、“石井方式を食べてもらう”方法を考えました。それが、前述のような“実際に幼児への指導を見てもらう”ことだったので。

この効果はてきめんでした。食わず嫌いも、一度味を知ったら一変するようになり、石井方式大反対の園長さんも、一転して礼賛者になり、“石井方式の実践者”になってくれました。わずか一年の間に、たちまち百余の幼稚園や保育園の支持を受けるまでに広まったのは、“幼児への実際の指導”を見てもらい、その真実の姿を理解していただけたからです。

3. 幼児への漢字教育の考え方

●……………すべきことに漢字を使う

漢字教育と言うと、すぐ漢字の詰込み教育だと思われるところから、言下に「とんでもない」と言って否定されがちです。また、「漢字教育より先に、すべきことがある」とも、よく言われます。これに対して私は言うのです。「先にすべきことがあるなら、それを先にやってください。ただ、そのすべきことに漢字をお使いください。“漢字で教える”のです。漢字で教えた副産物として、幼児が漢字を覚えることを期待しているだけです。ですから、覚えなくても一向にかまわないのです。しかし、例え覚えなくても、見せておけば、それだけのことはあろう、と考えているのです」

コラム 部首

戔

戔は、戔で才と戔ほことの形声字。才は“断ち切る”意味を表した言葉。従って戔も、“断ち切る”が本義の部首。

【裁】 衣類を作るべく布を“断ち切る”のが本義。一旦裁断すると変更ができなくなるので“最終的な決

着をつける”ことを「裁断」というようになった。

【栽】 木をりっぱに育てるべく、むだな枝を“断ち切る”のが本義。転じて“木を植える”意味にも使う。

“ローマは成るの日に成るにあらず”です。漢字もまた読める日の前に、読めないけれども、読めるための下地となる“読み”がなければなりません。

“漢字で教える”教育とは、そういう下地になるためのものです。

●……繰返して見る幼児の喜び

私たちは、“容易に覚える”ということをして、安易に喜んでいては間違えます。幼児は、気が向けば（“関心”を持って）どんな漢字でもいっぺんに覚えてしまいます。しかし、容易に覚えたものは容易に忘れることも、免れがたい事実です。

なかなか覚えなかったが、ようやく覚えた——こういう覚え方をした場合は、容易に忘れないものです。記憶が長持ちすれば、その間にまた

その漢字に出会う機会にぶつかって復習しますので、さらに記憶は確かになります。そう考えると、「物覚えの悪い子は幸いなり」と言えそうです。

覚えようと覚えまいと、忘れていようと忘れてまいと、とにかく使う機会があったら、一つの漢字を何回でも繰返して提出し、読む機会を与えることが必要です。

「皆、よく覚えたから、もうよかろう」——こうした考え方は、漢字教育に関する限り誤っています。つまり、「皆、よく覚えたから、よけい使つてやろう」でなければいけません。

漢字は、“覚える”ことが目的ではなく、“覚えた”あと、“使う”こと、“読む”ことが目的です。幼児が覚えたからこそ、私たちは、幼児に対して漢字を本当に“使う”ことが出来るわけです。

つまり、親も教師も、幼児に漢字を使って見せる機会があったら、何

コラム 部首

肖

肉体の意味の月と小との会意形声字。親子とは、肉体の大きさ以外は顔形、話し方、癖までよく似ているという意味で、“似る”を表した字。部首としては“小さい”の意味。

【消】 “小さい”意味

の肖と水との会意形声字。“水が少なくなること”。転じて全ての物が減少する意味となり、今では“きえる”意味。

【硝】 “水につけると

とけて消える石”という意味で名付けられた「硝石」のこと。

でもかんでも使って、幼児に漢字を読ませる機会を出来る限り多く作ることです。

幼児は、その重大な特性の一つとして“繰返し”が好きだ、ということがあります。三歳ぐらいまでの幼児は、繰返して飽きることを知りません。ですから、幼児の好むお話には、必ず繰返しがあります。幼児がその繰返しを好むから、そういうお話が昔からずっと語り継がれてきたのでしょうか。

「桃太郎さん、桃太郎さん、お腰に着けたものは何ですか」に始まる問答は、三回繰返されます。この三回繰返されるところが、幼児にはたまらなく快い聞きどころなのです。そして、繰返しのある物語を、幼児は、繰返し繰返し聞くことがまた、この上もなく好きです。すっかり覚えてしまっただけでも、なおそのお話をせがむほどです。

こういう幼児のことですから、漢字の反復提出もまた大歓迎します。

「よく覚えてしまっているから、もう面白がらないだろう」と気を回して反復を遠慮するのは、大人の間違った分別で、幼児は、「よく覚えて知っている字だから、得意になって読む」のです。

この“繰返し”を好む性質が“心の若さ”の正体です。精神が老化していききますと、“繰返し”がたまたまなくいやになってきます。

ですから、肉体は、これを使うことによってその若さを保つように、我慢して幼児の相手になり、“繰返し”を繰返しやることは、子供のためでもあります。大人が自分の“心の若さ”を保つのに役立ちます。

●……………たくさん覚えるほど良い効果

幼児の漢字教育で、幼児があまりよく漢字を覚えるので、「こんなに出来るようになって、小学校の漢字学習がつまらなくなりはいないだろう

【宵】 “家の中の人が皆似て見える”という意味で、“暗くなつた”ことを表す。「夜」や「夕」が自然現象の。“よる”を表すのに対し、宵は人間生活の感情が込められた“よる”のこと。

うか」と、心配されるお母さんや幼稚園の先生がよくいらっしやいます。これもまた、老化した心で、若々しい心を推量るところからくる見当違いです。

すでに述べましたように“若い”幼児の心は、繰返しを飽きるどころか歓迎します。それに、“出来る”から楽しいのです。出来て楽しいから、気に入った遊びに夢中になるように一所懸命にやります。一所懸命にやるからますます能力が向上します。

私は、小学校の一年生をたびたび指導していますが、漢字の書き方練習の時、わき目も振らずに書いているのは、必ず上手な子供です。

上手に書ける子は、それほど一所懸命にやらなくても好いと思うのに、一所懸命にやり、下手な子は、一所懸命にやってほしいと思うのに、一所懸命になれないのです。

成功の喜び、うまく書けたという喜びを知らない子供には、それを求めて努力するだけの意欲が燃えないのです。下手だからこそ練習しなければいけない、ということがよく解る私ども大人でさえ、やっぱり下手なことはつい億劫になるものです。

幼児も、漢字が得意になればなるほど、小学校へ行ったら、解る楽しさから、なお一所懸命勉強します。出来過ぎによる心配など決してありません。“出来なくて困る”……これこそ本当に困った悩みです。

と言うのも、出来ない子は、一番励みになる成功の喜びというものを知りませんので、やる意欲が出ないからです。やっても楽しくならないのです。意欲のない者は、何をしてもうまく出来るはずがなく、楽しくないはずがありません。こうして悪循環が始まるのです。

悪循環はどこかで断切らなければなりません。そして、どこかで好転すれば、全体がうまくいくようになるのです。例えば何かで褒められた、ということでの“いい気持”になれた。そこで子供に“やる気”が出た。そのた

め、今までより良く出来た。それがまた認められて褒められた。——これで、良い循環軌道に乗ったわけですが、こうなれば、もうあとはほんどん向上の一途をたどることになります。

確かに、この図式通りに軌道に乗せることは、実際にはなかなか容易ではありません。しかし、子供の長所を見付け出し、子供の能力を引出すことが“教育”だと考える大人なら、やはりこの軌道に乗せる努力をしなければなりませんし、努力すれば必ず実りは期待できます。

●……ポイントとなる言葉を漢字で示す

前に、「漢字教育より先にすべきことがある」という批判をする人が多いけれども、それに対しては、「漢字教育は、先にすべきその教育を漢字ですることです」と答えていると申しました。“先にすべきもの”とは、

集団の中での幼児の生活の確立とか、情操教育とか、そういうことを指しているのかと思います。

ところで、私たちのいう漢字教育というのは、漢字そのものを教えるのではなく、右のようなことがらを指導するに当って、そのポイントになる言葉を漢字で示しながら話を進める教育のことです。

例えば、廊下や道路での“右側通行”の話をする場合でも、ただお話をやるよりも、これらの漢字をカードに書くなり、黒板に書くなりして、聞いている子供たちにこれを見せながらお話をするのです。

子供たちに身近なことがらを表すこの程度の漢字は、ほとんどの子供がすぐに覚えます。また話そのものも、ただ話した場合よりも、漢字が示されたことによって、子供たちの意識を集中させ、話の内容を鮮明に印象づけます。

しかも、その翌日、これらの文字を漢字カードなり黒板に書付ける

コラム 部首

亢

手を広げ足を大きくふんばり、通せんぼをしている形を象った。抗の本字で、“ふせぐ”“こばむ”“さからう”。転じて“たかぶる”意味。

【航】 “抵抗”の亢と舟との会意形声字。

“川の流れにさからって舟を進める”こと。

【抗】 “こばむ”という意味の亢と手との会意形声字。“手をあげてふせぎ、こばむ”こと。「抵抗」「反抗」。

なりして見る機会を与えるならば、特に指導しなくても、無言のうち
に、前日の“右側通行”の話が子供の心によみがえり、ひとりで復習され
“右側通行”の生活指導が徹底されるのです。

4. なぜ幼稚園で漢字を教えるか

昔、ある人が、「子猫持つ身の悩みは、それがやっぱり猫になることだ」
と言って嘆いたということです。

チンパンジーをいくら教育しても、人語を操るようにはなりません。つ
まり、人間以外の動物は、いくら教育しても、反対に放っておいても、良
くも悪くもならない、ということです。

ところが、人間は、狼に育てられると“狼”になるのです。顔かたちは
人間でも、その心と行動とは、全く狼になってしまうのです。

人間以外の動物は、生れるとすぐ“独り立ち”します。鶏など、生れ
出るや、一人前の顔をして走り回り、餌をついばんだりします。

それに比べると、人間の赤ちゃんはひどく無能力です。母親の乳房を
吸うこと以外、何の能力もない、と言っても言い過ぎではないでしょう。

だから、人間は母親の胎内にいる期間こそ長いが、生れ出るのは、他の
動物に比べて“数年も早過ぎる”と言う学者があるほどです。なるほど、
鶏を見たら、ひよこなど、人間では十歳以上の子供に当りましょう。

しかし、人間は、“早く”生れ過ぎたために、万物の霊長になり得たの
だ、とその学者は言います。つまり、無能力の状態で生れたために、“育
て方”によって、狼になる可能性もあれば、霊長になる可能性もあるの
だ、ということです。

昔から「三つ子の魂、百まで」と言われており、現代の脳生理学は、

コラム 部首

韋

五は、止で止の反対
の形。止は止で、足の
裏の象形。五を下向
きにしたのが𠄎。つま
り五と𠄎は足の向き
が反対で、韋は“すれ
ちがう”の本義。

【衛】 行と韋との会
意形声字。行の古い形
は𠄎で、道の象形。道

の象形により“歩行”
を表した指事字。“道
を行ったり来たりす
る”が本義。英語のパス
ロール。

【偉】 “ちがう”という
意味の韋と人とで普
通の人とはちがった
人、つまり“えらい”人
という意味を表した
会意形声字。

それを裏書きするように、「人間的な思考をつかさどっている大脳は、生後三年間に、最も目覚ましい成長を遂げる。三歳児の大脳は、成人の大脳の約六十五%にまで成熟している」と述べています。

もし、この三年間が母親の胎内で過ぎたのなら、人間の子供は、能力的に、ほとんど個人差を持たなかつただろうと考えられます。そうではなくて、人類は、この三年間を与えられたために、大きな“可能性”を持つに至った、というわけです。

このことは、同時に、人類は大変な責任を神から与えられたことを意味します。より良くすることも出来る代りに、悪くすることが出来るのですから。

人類は、胎内で育てるべき三年間を、神に許されて、自らの手で、自らの好むように教育する責任を持ったのです。子供が、他の動物のように、独り立ち出来るまで母親の胎内で育てられたら、今ほどには人類

は“教育の責任”がなかったに違いありません。

ともかく、人間の赤ちゃんは、その育て方によって、最もすばらしい動物にもなれる代りに、動物以下の醜い存在にもなれるのです。私たちは、神から許された“子供を教育する責任”の重大性を認識して、その責任を果たすことに努めなければなりません。

●……言葉と文字の教育

人間は、言葉を持つことによって、人間になり得た、ということは真実でしょう。しかし、人間は、音声言語から、視覚言語、つまり文字を持つことによって、急速に文化を発展させることが出来ました。

すぐに消えてしまい、近くにしか伝わらない“音声言語”に比べ、いつまでも保存でき、世界のどこにでも伝えられる“視覚言語”のお蔭で、私

たちは、いかなる国の、いつの時代の偉人の思想をも受入れることが出来るようになりました。

この“言葉”と“文字”の働きとその価値とを、私たちは正當に評価しなくてはなりません。私たちは、あまりにもその思慧に馴れてしまつて（例えば“空気”のように）、その価値を忘れてしまつていゝように思われます。

私たちは、空気や水の価値を、金やダイヤモンド以下と考え誤つてはなりません。

確かに文字の価値は、個々の文字そのものにあるのではなくて、それが“偉人の思想”を表現し、それを人に伝える点にあります。とはいへ、文字と思想との関係は、肉体と精神との関係に似ていて、私たちは、思想を尊重するがゆえに、文字の価値をも認めなければなりません。

●……漢字は経験を呼び起す信号

私たちが、幼稚園で漢字を教えていることに対して、「幼児に漢字を教えてどれだけの価値があるか、大切なのは思想であつて、漢字ではない」……と言う人があります。本当にそうでしょうか。文章から漢字を取り去つたら、あとに何か残りますか。精神が大切なら、それを宿す肉体を大切にしなければならぬように、思想が大切なら、その思想を宿す漢字を大切にしなければなりません。

漢字は、私たちの知っている実体や行つたことのある経験を、頭の中に思い起すための信号です。漢字を学習することは、実体を見たり、触れたり、経験して、その経験を漢字と結び着け、漢字を見れば、すぐに実体や経験が頭の中に思い浮べられるようにすることです。

漢字が信号として速く大脳に伝ひ、速くそれに反応できる、それが

コラム 部首

ナ

手を表した部首

【右】 “食事の時に食べ物を口に運ぶ手”のこと。  ↓ 右

【左】 “定規（工）を持つ手”。中国では右を上位とするので「左遷」は官位が下がること。  ↓ 左 ↓ 左

“頭が良い”ということなのです。それには、漢字と、それに対応する実
体や経験との結び着きを良くすることが必要です。

私の言う“漢字教育”とは、この“漢字と、漢字に対応する実体や経験
との結び着きを良くし、漢字が経験を呼び起すための信号として速く
反応できるようにすること”なのです。

コラム 諺

雨だれ

石を穿つ

雨だれがしたたり
落ちる下にある石に
は、くぼみがある。そ
れは一しずくの水滴
が堅い石に穴を空け
たもの。僅かなこと
も同じことを長い間
継続し反復するとい
かは大きな仕事を成

第4章 漢字で授業

1. 絵を描く時間

●……漢字の呼び水

動物園に遠足に行った、その次の日の“絵を描く”時間です。黑板には、

「遠足」次に「動物園」と書かれてあります。

「いろんな動物がいましたね。何が一番面白かった？」

「僕、象さん。」

「そう。象さんね。」

先生は、そう答えながら、「動物園」の次に「象」と書きました。

「象さんのどんなところが面白かった？」

し遂げるものだ、とい
うこと。

「長い鼻で、食べ物を挿んで食べてたところ。」
 「そう、長い鼻だね。」

そう言いながら、続いて「長い鼻」と書きました。こうして、先生は、昨日の遠足の経験を、子供たちに尋ねては、それを思い出させ、そのうち絵になりそうなものを、漢字で書付けていったのです。こうして黒板には、「猿」「白熊」など、いろいろな動物の名前が書き並べられました。

こうした話合いの後に、絵を描き始めたのです。子供たちは、初めて見る漢字でも、この話合いの中で、ほとんど覚えてしまいます。関心を持って見るものは、子供たちには覚えずにはいられないのです。

しかも、覚えてしまった漢字は、逆に、昨日の経験を呼び起す“信号”になり、これが子供たちの描く“遠足”の絵を豊かな、生き生きとしたものに導くのです。

この指導をなさった先生は、どなたもおっしゃっています。「漢字で指導

するようになって、子供たちの描く内容が豊かになりました。今まで子供たちがなかなか描けないでいる時、呼び水のつもりで黒板に私が絵を描いて見せると、子供たちはただその模倣をしたものですが、“漢字の呼び水”は決して模倣にならず（模倣しようとしても、模倣のしようがありません）それぞれに個性ある絵を描いてくれます」と。

2. 歌の時間

●……漢字で歌の指導も

“漢字で歌の指導”を行った先生方は、次のようにおっしゃっています。

「歌詞が何番もある歌は、一番、二番くらいは、歌詞をメロディーによ

コラム 諺

傍若無人

“人を人とも思わぬ無礼な態度や言動”。

二千年も前の、史記の

荊軻けいけいの伝記にある言

葉。かたわら「傍かたわらに人無きが

若し」と訓読されるよ

うに、周囲にどんなに

人がいても全く気を

遣わないことで、“周

囲に人がいないのと同

じだ」と言った。

【傍】 旁が城門の“冂”に“方”を加えた字で、“城門の左や右の方”つまり“かたわら”のこと。これに人を加えた「傍」は“人のかたわら”という意味。
 瀆↓滄↓滴↓傍

く合せて数えるのですが、三番、四番となると、歌詞を暗記していないものから、かなで書かれてある歌詞を見ながら歌います。

すると、どうしても、歌詞がメロディーからはみ出てしまうのです。曲が終わったのに、歌詞のほうが残っているのです。

ところが、歌詞を漢字で書いて見せますと、曲に歌詞がちゃんと来るのです。かなの場合は、練習しても練習しても、なかなかうまくいかないのに、漢字で書き表すと、練習しなくてもぴたっとうまくいくのです。

結局、かな書きの歌詞は、読取れないのです。拾い読みしているので、曲に追付かないのです。漢字で歌詞を書いて歌わせるようになって、歌の指導の能率がとても良くなりました。」

“折紙”などの工作指導の場合にも、漢字を利用できます。図で説明する場合にも、書入れる用語を、「折る」「切る」などと漢字で書いたほうが、一目でパッと判るので効果的です。

組の名前、幼児たちの名前、みんな漢字で書いてください。下駄箱など、かな書きされたものは、みんな同じように見えて、先生が探し出すのにも骨が折れます。漢字で書いておいたら、すぐ見付けられます。

幼児も、自分の名前などすぐ覚えて、たくさん友達の中から、容易に自分の名前を捜し出すことが出来ます。また、友達の名前も隣から順々に覚えていき、こんなところから意外に漢字をたくさん覚えるものです。

3. 生活指導の場面で

ただ、口から耳に伝えるだけでは、幼児にはなかなか理解できませんが、耳に訴えるのと同時に、目にも訴えて、幼見の“視聴”両器官を動員

【若】 右手の「右」と草の「艹」で“手で摘み取る草”つまり春の野に出て摘む“若草（若菜）”のこと。今では“わかい”と使われる。
 若↓若↓若↓若

話に引張込む努力をして、お話を進めていくことは、大変なことではあります。また、それだけにやり甲斐のある仕事だと思えます。

また、お話の種がすぐ尽きてしまつて困る、という嘆きもよく聞きます。これは、“話の接木”をなさつたらいかがでしょうか。

その一例として、一寸法師を挑太郎に“接木”した、“一寸柿子”のお話を紹介しましょう。

昔、昔、大昔、ある所に、お爺さんとお婆さんが住んでいました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました(ここまできると、今までかたずをのんで聞いていた子供たちは「知っている」「挑太郎さんの話だ」と口々に言い出します。そこで、「そう、挑太郎さんのお話とそっくりだね。でも、これは、挑太郎さんのお話ではありません。これから違ってくるから、よく聞いていてね」と言つて、子供たちをなだめ

す。

ある日のこと、お爺さんが柴刈りをしていますと、柿の木に、赤い、大きな柿の実が成っているのが目に入りました。

お爺さんはそれを見ると、食べたくなりました。そこで、お爺さんは、木に登っていきました。

お爺さんの手が、もう少しで柿の実に届くところで、柿の実が、ポターンと落ちてしまいました。そして、コロコロ、コロコロと下のほうへ転がっていきました。

お爺さんは、急いで木から降りて、「ここから、柿や、待て待て」と言いながら、柿の実を追いかけ始めました。でも、お爺さんは、年取つていて、速く走れないので、とうとう、柿の実が見えなくなつてしまいました。

お爺さんは、がっかりして、追いかけるのを止めて、おうちへ帰っていきま

さて、お婆さんは、川で洗濯をすませ、うちへ帰って、お爺さんの帰りを待っていました。すると表の戸がコトンと音を立てました。「あ、きっとお爺さんのお帰りだよ。」

お婆さんは、「お爺さん、お帰りなさい」と言いながら、戸を開けました。ところが、そこにはお爺さんがいなくて、赤い、大きな柿の実が転がっていました。

「おや、まあ、こんな所に柿の実が。だれが持ってきてくれたんでしょうね」。お婆さんは、柿の実を拾って家に入り、お爺さんの帰るのを待っていました。

そこへ、「ただ今」と言ってお爺さんが帰ってきました。(中略)二人で仲良く二つに切って食べようとしますと、柿の実が真中から二つにパツと割れて、中から、かわいらしい赤ちゃんが生れてきました。赤ちゃんは女の子でした。

柿から生れたので、柿子という名前を付けました。柿子はいくつになっても、生れた時より大きくなりませんでした。一寸くらいしかありませんでしたので、皆が“一寸柿子”と呼ぶようになりました。

お爺さんとお婆さんは、ある日、神様にお祈りしました。「どうぞ神様、うちの柿子を大きくしてください。」

すると、ある晩、夢の中に神様が現れて、「都へ行きなさい。都に一寸法師がいて、それが柿子を大きくしてくれるだろう」と教えてくれました。

年を取ったお爺さんとお婆さんにはとても遠い都までは、歩いていくことが出来ません。小さな柿子が歩いていくのは、なお大変です。三人は困ってしまいました。

そのうち、柿子ちゃんが、「私にいい考えがあります。お爺さん、私に風船を買ってきてください。お婆さんは、私に針を一本ください」と言い

コラム 諺

天は自ら助くる者を助く

他人の助けなど当てにせず、自分の力で道を切り開いて行こうとする者には、自然と道が開かれ、成功するものだということ。

アメリカの独立戦争時に活躍したフランクリンが、好んで口に

た言葉。

𠄎 ↓ 𠄎 ↓ 自

𠄎 ↓ 且 ↓ 且

𠄎 ↓ 𠄎 ↓ 力

【天】 人が両手両足を広げた“大”に“一”を加えた字で、“頭のてっぺん”のこと。

𠄎 ↓ 𠄎 ↓ 天

ました。(中略)

柿子は風船に乗って、空高く上っていきました。風船は都に向って飛んでいきます。空からの眺めはとてもきれいです。柿子ちゃんは、あっちこっち眺めて楽しんでいました。

そのうちに、空が曇って、雨が降り出しました。柿子ちゃんは、頭からビシヨ濡れになりました。雷がゴロゴロと鳴り出しました。それでも、柿子ちゃんは元気に都のほうへ向って飛んでいきました。

雨が止んで、お日様がニコニコ顔を出しました。きれいな虹が出ました。柿子ちゃんは虹の橋を越えて飛んでいきました。

ところが大変です。鳩が飛んで来たのです。柿子ちゃんは小さいので、鳩にひと口で食べられてしまいます。さあ、柿子ちゃんはどうしたでしょう。

柿子ちゃんは、お婆さんにもらった針で、鳩をチクリチクリと刺しま

した。鳩は「痛い、痛い」と言って逃げていってしまいました。(中略)

柿子ちゃんはどうとう都の空まで飛んで来ました。きれいな家がたくさん見えます。柿子ちゃんは、風船の空気を少しずつ抜いて下に降りました。(以下略)

お話の筋は、その時の思付きで、どう運んで行こうと、話し手の勝手です。しかし、本を読んで聞かせる場合とは違った変化が、幼児にとって大変な魅力となるのです。

●……時々質問する

子供たちの心を引着けるためには、時々質問をするのも良いと思います。

「柿から生れた赤ちゃん、何という名前を付けたと思いますか」とか。また、「お婆さんが、お爺さんのお帰りだと思って戸を開けると、お爺さんではなくて柿の実だった」という所で、「お婆さんは戸を開けましたところが、そこにはお爺さんがいなくて……」と言って、そこでちょっと休み、子供たちの顔を「さあ、何だろう」というように見回しますと、いつも(たいてい)子供たちの中から「柿の実!!」という声が飛出します。ころころ転がって行って、見えなくなってしまう柿の実が、ここに再び登場してくることを、子供たちは期待しているのです。

物語から、柿の実が消えてしまったのですが、子供たちの頭の中には、ちゃんと残っていて、いつでも出てくるチャンスをねらっているのです。

子供たちは、ただ受身で、先生の話の話を聞いているのではないことが、こういうところでよく判ります。いろいろ推理を働かせながら、時には話し手よりずっと先のほうまで進んで、「早く来ないかな」と言わんばかり

に、待っている犬のように、先回りしているのです。

先生のお話をただ聞くというだけでなく、このように、推理しながら聞くというようになりますと、子供の頭の働きはすばらしく良くなると思います。

こういう聞き方をする子供は、全神経をお話に集中して聞いています。心が決してよそに外れたりなどしません。長い物語でも、決して飽きたような顔を見せません。

こういう子供に育てるためには、子供の一人一人に語り掛けるようなつもりで(事実、一人一人に顔を移して、子供の目をちゃんと見て話すようにします)話しますと、子供のほうもそれに必ず反応してきます。

落着いて、人の話を注意深く聞ける子供を育てるのは、先生の責任です。先生の、毎日の話し方の上手下手が、子供の“話を聞く態度”を作

コラム 部首

奇

大と可との会意形声字。“大いによろしい”ことから“珍しい”。珍しいことは二つとないの
で“一つ”の意味も。また珍しいことは“不思議なことでもあり、変だな”“あやしむ”ことにもなる。

珍しい↓

「珍奇」「奇計」

一つ↓

「奇数」

不思議↓

「奇術」「奇跡」

あやしむ↓

「奇怪」

るのです。先生は“話し方”の工夫をすることに努力しなければなりません。

5. 物語の読み方

物語の読み方について、お話したいと思います。

物語には、初めて見る漢字が、かなり多く使われていますので、子供たちに、独力でこれを読むことを期待しても、それは無理です。

初めは、お話を聞かせるような調子で、物語を読んで聞かせます。この時、子供たちに、字をたどらせたいと思って、ゆっくりと読みがちですが、これはいけません。

お話を聞く場合でも、文章を読む場合でも、全体の意味を正しく

捉えるために適当な速度というものがあるのです。遅過ぎるよりは、むしろ、早過ぎるくらいの方が解りやすいものです。一般に、ゆっくり話したり、ゆっくり読んだほうが解りやすい、と考えられています。これは間違いです。

したがって、最初は、子供たちに文字をたどらせることなど考えないで、普通にお話をする時の速さ以上には遅くしないで、すらすらと読んでいくようにします。

お話を聞く場合でも、物語を読む場合でも、同じものを繰返すことの楽しみと、新しいものを聞く(読む)楽しみとがあります。

物語を知り尽していた場合は、ここはこう、あそこはどうと、安心して、知り尽した道を散歩するような楽しみに似たものがあります。それと反対の場合は、未知の土地を旅する時のように、物語がどうなるだろうかと、心を踊らせながら聞く(読む)楽しみがあります。

【寄】 家の意味の「」と、奇との会意形声字。“家に身を倚(よ)せる”という意味。また“与える”意味にも使われる。

幼児には、とりわけ、同じものを繰返すことを楽しむ性質があります。繰返すことによって、それを身に付け、自分のものにして成長するために、それは必要な性質です。だから、幼児にとりわけ強く備っているのでしょうか。

絵本の物語は、繰返し読んで聞かせて、幼児がソラで言えるまでにしてやりたいと思います。それには、一節一節、復唱させるようなやり方で、読ませるのも好いと思います。

幼児は、文字が読めなくても、大人のまねをして、本を読むまねをしたがるものです。だから、先生のあとに付いて復唱することは、易しく出来て、しかも結構幼児に満足できることです。

物語が暗誦できるようになりますと、言葉と文字とを対応させて、どの字は何という字かを考えるようになり、目立った漢字からだんだんと覚えていきます。

物語に出てくる漢字は、取立てて教えてやらなくても、長い間には、前後の関係から判断して読み、読んで覚えるものですから、取立てて教える必要はありません。

また、知らない漢字を、前後の関係から判断して読むことは、思考力を伸ばし、頭の働きを良くする作用がありますので、教える代りに質問して考えさせましょう。

●……変えてみたい提出の場

物語の漢字が、前後の関係で読めるようになったら、その漢字をカードにして、子供たちの認識をさらに深めるようにしましょう。

物語の漢字は、物語の中では読めても、カードで出されると読めないということがよくあります。どこで、どんな形で出されても読めるよう、

認識を深める工夫をしてやらなければなりません。

ある有名な学者の話ですが、ある日、駅で会った人から声を掛けられたが、確か見覚えのある顔だと思うだけで、だれだか思い出せない。気になっていたところ、翌日、隣の庭でその顔を発見した。

「何だ、お隣のご主人だったのか」というわけです。

いつも隣という決りきった状態で会っていたのに、思いがけなく異った場所であつたために思い出せない、ということはよくあることです。結局、隣という条件を頼みにして、認識を深めることをしなかつたためです。

漢字の認識を深めるために、提出の場をいろいろ変えてみる必要が必ずあります。

●……読書力を低下させる拾い読み

かなは表音文字ですから、幼児たちは、どうしても「あ、る、ひ、お、ば、あ、さ、ん、が……」というように、かなを一字ずつ拾って読む、ということになります。

読書は、ある程度スピードがないと、文意が捉えにくい、と前に述べました。それはなぜでしょうか。

それは、日本語の性格として、「文章を、初めから終りまで、ひと息に速く読み通さないと、文意を掴むことが難しい」という性格があるのです。例えば、「昨日、私は、東京駅へ、友人の見送りに、行きました」という文を例に考えてみます。「昨日」「私は」「東京駅へ」「見送りに」という言葉は、それぞれには全くつながりのない言葉であつて、これだけ聞いたのでは、まことに支離滅裂という感じで、文意も掴みようがありません。

コラム 部首

音

古い形は否で否と同じ形。「反対」「そむく」という意味で、「背」と同音同義。「違背」「背反」などを使う。

【倍】 “そむく”の音と人との会意形声字。倍反(そむく)。対立が生ずることは一が

二になることで、“一が二にふえる”ことを倍と言うようになった。

【培】 倍加(ふやす)の意味の音と土との会意形声字。“草木に肥えた土を加えて、草木を育てる”こと。“つちかう”こと。

これは、

昨日、行きました。

私は、行きました。

東京駅へ、行きました。

見送りに、行きました。

という関係にあるのですから、「昨日」から「行きました」まで、ひと息に読み通さないと、統一が着かないのです。

かなばかりの文章は、スピードが出ませんから、読み終わっても、統一が着かず、文意が掴めないことが少なくありません。電報文など、短くても、何回か読み返すことがよくあります。

読書の際のスピードは、単にスピードと考えないでいただきたいと思えます。つまり、最初の読書を、拾い読みさせないような配慮が絶対に必要だ、ということをお忘れなくいただきたいと思えます。

6. 漢字を特別扱いしない読解指導

初めて読む文は、かなばかりの文だと、なかなか読めるものではありません。文字をただ発音していただくだけで、それをまとめて言葉として捉え、さらに文として捉えることはなかなか出来ません。

それで、“読解指導”ということがあるわけです。漢字だと、教えられない限り読めませんが、一度教わりますと、初めから文字を言葉として掴むことが出来ますので、すぐにすらすらと読めるようになります。

●……「提出したから覚えろ」は禁物

漢字を取立てて、特別に指導しないのが石井方式の特徴です。ただ、

コラム 部首

周

用と口との会意字。

用は牧場に張り巡らした柵の象形。周は“口を巡らす”ことで“言葉を十分に尽くして説明する”から転じて広く“物事のゆきとどく”こと。

読めないで、つまづいている時に、その読み方を教えるだけです。意味が解らないようだったら、意味も教えます。

決して、初出で、その漢字が読めるようにしようと思っただけじゃありません。一度学習した漢字が、二度、三度繰返されて、それで読めないでいても、やはり最初の時と同じように、優しくその読みを教えるのです。

そして、繰返し、繰返し提出して、何十回になろうとも、読めて、頭にはつきりと刻み付けられるようになるまで導くのです。

読めるようになったら、ますますそれを読む機会を作って習熟させます。算数の文章題に、理科や社会科の説明に、掲示に、あらゆる機会を求めてその漢字を使用することに努め、自然と習熟させるのです。そうすれば、字形についての認識も、しだいに深まっていきます。

その言葉と共に、字形も思い浮かべられるほどに習熟した頃を見計らって、“書く”指導を行います。すでに頭の中に描けるようになった漢字を、

どこから書き始めて、どのように完成させるかを教えるのです。

従来の“書く”学習と違って、いっぺんに整った字を書くようになります。子供たちも楽しんで書きます。

「提出したから覚えろ」ではなく、出来るだけ、目に触れる機会を与えて、確実に習得させよう、という考えなのです。これが、石井方式です。

7. プリントを利用して読む

短期間に無理して覚えたものは、忘れるのも速いものです。とりわけ、テストのために覚えたものなど、テストが終れば、忘れてしまうのが普通です。

【週】 “まわりをまわる”が本義。今ではもっぱら七曜の一まわりする意味に使う。

【調】 ゆきとどく意味の周と言との会意形声字。言葉がよくゆきとどいて、そのため物事が“よくとどく”という意味。

漢字などのように、一生使うものの学習は、長期間に亘って、ゆっくりと学習を重ねなければ、決して身には付きません。だから、石井方式では“新出漢字”という特別の扱いはしません。

その代り、出来るだけ漢字を読む機会を作って与えます。そのため、普通の先生なら、話で済ませるものでも、黒板に書付けて読ませます。

また、プリントも毎日作って与えます。私は、ほとんど毎日、原紙に二枚は、子供たちに読ませるための教材を作って与えました。それは大変ではありますが、子供たちに“読む”習慣を与えるために、ぜひ必要だと思ったからです。

どんな授業でも、分析したら“聞く”活動が大部分を占めるでしょう。“話す”“読む”学習でさえも、それは一人だけの活動であって、他の子供たちは、それを“聞”いているのです。

だから、国語の学習としては、だれもが“読む”“書く”学習をするような工夫をする必要があると思います。私は、そのために、毎日、プリントを用意し、それを“読み”、それから“書”かせました。

プリントには、多くの漢字が使われていて、だれでもそれを読まないことには、国語の学習が進められないようになっていきます。問題を読んでは、その解答を書き、問題を読んでは解答を書くのです。

では、その一例を左に掲げます。

源五郎鮓を読んで、次の質問に答えなさい。

一、源五郎さんは何を持っていましたか。

(答、不思議な太鼓を持っていました。)

二、それはどうして不思議なのですか。

(答、鼻が高くなったり、低くなったりするからです。)

三、不思議な太鼓で鼻を高くするには、どうするのですか。

コラム 諺

五十歩百歩

二千三、四百年前、

魏の国の恵王を發奮させるために孟子が言った言葉で、“どちらも似たりよったりで大きな違いが無い”こと。

× ↓ 互 ↓ 五 ↓ 五

↗ ↓ 十 ↓ 十 ↓ 十

【一步】 片足を前に踏み出したことを言う場合と、これを「半歩」と言って更に他の足を前に踏み出すことを「一步」と言う場合がある。

(答、太鼓の片方をたたいて、「鼻、鼻、高くなれ」と言います。)
 四、源五郎さんは、どんなことをして、大勢の人に喜ばれましたか。
 (答、太鼓をたたいて、大勢の人の鼻を高くしたり低くしたりして喜ばれていました。)

右は、私が、一年生の国語の学習で実際に作ってやらせたものです。一年生でも、こういう問題を、自分で読み、それに応じる解答を書くことが出来るのです。

算数も、文章を読んで、式を立てて計算をする“文章題”を、毎日、プリントにして与えました。子供たちは、この文章題を解くのが楽しくて、一日でも休もうものなら、不平を言うほどでした。

右にその例を掲げましょう。

一 春男さんの前に 〇 人、後ろに 〇 人並んでいます。皆で、何人並んでいるでしょう。

(答、〇 人 + 〇 人 + 〇 人 = 〇 人)

二 ケーキが 二〇 個あります。 〇 個ずつ 〇 人にやりました。何個残っていますか。

(答、二〇 個 - 〇 個 = 〇 個)

三 花子さんは、色紙を 一〇 枚持っていました。妹に 〇 枚やりました。残りは何枚でしょう。

(答、一〇 枚 - 〇 枚 = 〇 枚)

四 時刻に合うように、長い針と、短い針を書入れなさい。

(あ) 〇 時半 (い) 〇 時 (う) 二 時半 (時計の針、省略)

五 上の時計のうち、朝起きる時刻に一番近い時刻の時計はどれですか。

(あ) (い) (う) で答えなさい。

六 夜寝る時刻に近いのはどれですか。

コラム 諺

角を矯めて牛を殺す

牛の角が曲っているのが気になって、直そうとして牛そのものを殺してしまった。

僅かな欠点を直そうとして、かえってその全体をだめにしたたり、取るに足りない問題にとられて肝腎な大問題を疎かにすることなどを戒めた諺。

い ↓ 角 ↓ 角

石井方式で学習する一年生にとっては、こういう“文章題”を解くのは、クイズの遊びのようなもので、楽しくて楽しくてたまらないのです。

●……●社会科の教材もすらすらと。

予防注射

みんなで並んで、保健室へ行きました。予防注射をするのです。内田先生が「良い子は痛くありませんよ」とおっしゃいました。みんなきちんと並んで、番の来るのを待っています。とうとう僕の番になりました。僕は、胸がどきどきして来ました。目をつむって、手を出しました。ちよとちよとしたら、もう予防注射は終わっていました。「良かったね、これで病気にいからなくなるよ」と、石井先生がおっしゃいました。

右は、一年生の、入学後、二、三か月経った頃の社会科の教材です。この時の新出漢字は「・」の付いた七つの漢字でした。

このプリントは第二時限に使用しました。第一時限で、「予防注射」と黒板に書いて、「予防」の言葉の意義から、学校で行う予防注射の意義についてお話をしてあったの第二時限です。すでに言いましたように、初出で覚えさせようとは思いませんから、「予防注射」が読めることは期待していませんが、このプリントを配りますと、「予防注射」と読む声があちこちから聞えました。

さて、配り終わると、指名読みさせます。新出漢字でも、「保健室」「待つ」などは、前後の関係でたいてい読めます。入学時には、一つの漢字さえ読めなかった子供たちが、わずかに二、三か月で、この程度の文は、いさなり読ませても、かなりすらすらと読むようになります。

数人に指名読みさせてから、斉読みさせます。斉読みといっても、私は、か

【矯】 矢と喬から作られた字。喬は夭と高との合字。夭は大の字の頭の部分を横に傾けた形で、「生れつき頭がしっかりと立たない虚弱な人」を表した。

夭 ↓ 夭 ↓ 夭
 夭 ↓ 夭 ↓ 夭
 夭 ↓ 夭 ↓ 夭
 夭 ↓ 夭 ↓ 夭

なりのスピードで斉読させます。普通の話をする程度より遅くさせません。

●……効果が少ない性急な学習

前にも述べたことですが、「何回練習したんだから、覚えてもらわなくて……」と、子供に期待してはいけません。何回でも覚えるまで提出を繰返すのが教師や親の役目だと考えることです。

従来の「初出の時に習得をねらう」漢字指導は、教師や親にとっても大変なことであり、子供にとってもかわいそうなことです。やってきつと出ることでないからです。こんな性急な学習は、一時的には覚えられなくても、必ず、間もなく忘れられてしまいます。

私の指導は、漢字こそたくさん提出しますが、指導者が「覚えなさい」と騒ぎませんから、子供たちも漢字を覚える義務感に責められることはありません。にもかかわらず、数多く、反復して読まされるので、いつとなく結構覚えていきます。

また、読めるようになったからといって、漢字についての認識は、いっぺんに深まるものではありませんから、習得できたと思っても、なお繰返し提出して読む機会を与える工夫が大切です。そうしてこそ、表現しうる“漢字力”に育つのです。

8. 体系的科学的な新しい漢字学習

石井方式では、「漢字を教える」ということを避けていますが、「漢字を教える」ことを全く否定しているわけではありません。

コラム 諺

多芸は無芸

“何でも上手”とは何でもひと通りこなすというだけで、本当に上手なものはない。

「二兎を追う者は一兎をも得ず」という戒めがあるように、ただ一つの道を選んでそれに力を集中させることが成功への近道だ、ということ。論語にも「君子は多ならんや」とある。

ただ初めは、“新出漢字”という改まった漢字学習ではなくて、「新しい言葉を、漢字で学習する」という考え方で、学習の目的を言葉におき、漢字はその学習のつけたしにすぎないというように気軽に扱い、読む機会を反復することによってその認識を深めていく、という方法をとって、読める漢字の教を増すことに努めます。

読める漢字の数が増えると、これを整理しまとめます。

意味の似たもの、反対のもの

字形の似たもの(休―体)

発音の似たもの(暑―熱)(陰―検)

同じ仲間のもの(口―目―耳―鼻)

ついで、“部首”による体系的、科学的な漢字学習に進みます。

漢字の大部分は、“部首”と呼ばれる部品の組合せによって出来ていま

す。例えば、当用漢字は一八五〇字ありますが、それに使われている部首は一九二個です。一九二個の部品がいろいろに組合せられて、一八五〇字の漢字が出来上っているのです。

だから、一九二個の部品の持つ意味や性格を、その本質からよく理解していくならば、一八五〇字の当用漢字はもちろん、それに数倍する量の漢字の意味、読み方まで、おおよそ推察することが出来るのです。例えば、「整」という漢字は、「束(ソク)」「攴(ボク)」「正(セイ)」の三つの部品によって組立てられています。これは、さらに、「束」木、口(輪の形)「攴」ノ(棒またはむち)、又(手)「正」一(線)、止(足の形で、とどまる意)と、それぞれ二つの部品によって出来ています。

「束」は、木に輪をかけて“たばねる”。「攴」は、手に棒を持って“たたく”。「正」は、止まるべき線に止まる、つまり“ただし”意味を表しています。

【芸】 旧字体は藝で、本字は藝で人がしやがんで木の手入れをしている姿を表した字。今の“農芸”。それが人間として大切な技能であるところから今では“学芸”“芸能”と使われる。

【多】 月の変形の「夕」を重ねた形で“夕方”を多く重ねる“からおおい”ということ。

【無】 火の燃える様を表した“灠”と、フという発音を表す“無”で“火で焼き尽くされて何も無い”こと。

だから、「整」は、木を束ねて、不ぞろいになった所を叩いて、きちんと正しくすることを表した字であることが、その部首を見れば解ります。漢字は確かに字形が複雑で、機械的にかむしゃらに覚えようとしたら難しいものがあります。しかし、その部品である“部首”を一つ一つ理解して、これを論理的に学習するなら、これほど易しく、楽しく覚えられて、しかも忘れにくい文字はありません。

「棋、期、基、箕」……其

「募、暮、墓、暮」……莫

複雑に見える漢字も、右のように整理してみますと、共通した部分があり、それぞれの発音を表しており、その上、その言葉としての基本的な意味を持っていて、それを押さえて学習すると、漢字の複雑さは、困難どころか学習を助けることがわかります。

このような、体系的、科学的な漢字学習法が、従来の漢字学習には

見られませんでした。私は新たにこれを打立てて、こういう学習をすべきだと提唱しているのです。

石井方式では、「社会科用語は社会科で、理、数科用語は理、数科で提出し、指導すべきである」と考えていますが、これは、石井方式の基本原則を実施すれば当然そうなるべきものですが、それ以上に、言葉を漢字と共に学習することが言葉の理解、および記憶を助けるからです。「さんかく、ちよくせん、四しや五入、しゆく図、しゆくしやく、がい数、がい算」は算数用語ですが、これを漢字で表記するとずっと理解しやすくなります。

「くっ析、しよう点、地下けい、さ岩、でい岩」(理科用語)では、言葉の意味を理解することが難しく、記憶も安定しませんが、漢字なら理解しやすく、記憶が安定します。

「だん流、こう水量、こう水、き権、内かく」(社会科用語)これらは、

コラム 諺

一陽来復

孔子が最も愛読したとされる「易経」にある言葉で、“悪いことが長く続いた後に良いことが回ってくる”こと。陽気の絶頂の夏至が過ぎると秋、そして冬至になる。

しかし「陰極まれば、陽生ず」と言われ

るように冬至を過ぎると必ず陽気が回復すること。

【陽】 崖の意味の阝と、“日の光のふり注ぐありさま”を表した日(り)から、“日当りのよい崖”が本義。

阝↓阨↓陽↓陽

漢字で表記してこそ理解できる言葉であって、ぜひ、漢字で表記して指導していただきたいと思います。

「他教科で漢字を教える」と考えるからこそ負担になるように聞えませんが、実は、その教科書学習に大切な役割を果している用語を理解しやすくするために、「漢字で学習」しているのですから、負担になるどころか、学習負担が軽くなるのです。

教科書に漢字を貼ることは、時間を取り、児童にとっても大変な負担ではないか、と考えられそうですが、実は、そうではないというのが、これを実施している先生方の一致した意見です。

黙々と貼付ける作業の中で、子供たちは、静かな、深い読みの学習をしている、というのです。それは、他の方法では得られない貴重な、価値ある学習だということです。

●……● 転校しても困らない

漢字の学年配当表を無視して教えたら、学校により漢字学習の範囲が違って、転校の場合など困るだろうと心配される方が多いようです。

私は小学校を卒業するまでに、学校が三つ変わりました。この三つの学校が、三つとも方言を異にしていただけにとても苦痛でした。話す言葉がお互いに通じない、これはどの苦痛はほかにはないでしょう。これに比べたら、学習した漢字の違いなど、物の数ではありません。言葉の場合でも、泣くのは一週間です。一週間で溶け込んでしまいます。漢字で悩むのは、読めない漢字が出てきた時だけです。学習しない漢字でもかなり文脈から推して読めるものですから、読めないで困るということは、そうそうあるものではありません。それに学校差などというものは滅多にあるものではなく、あっても環境に順応しやすい子供はすぐその差を埋

【復】 道路の形を表した𠄎の省略形𠄎と「重なる」の“復”との合字。“行った道を重ねて通る↓かえる”こと。別の道を通って帰ったのでは復とは言えない。

𠄎 ↓ 𠄎 ↓ 復 ↓ 復

めてしまいます。

ご参考までに、ある母親の手記を掲載しましょう。

世田谷に住んでいました時に、テレビで東山小学校の石井学級の漢字教育を知り、とても感心しておりましたが、はからずも十二月初めにこの学校に転校した子供は、石井学級に編入されました。

最初の二日間は、家に帰っても泣いておりました。国語はもとより、算数も、文章題は漢字で提出されているので、読めませんから解くことが出来ません。どうなることかと思っておりましたが、三日目から猛然とフアイトを燃やして漢字に取り組み始めました。学校から帰ると、「今日は、こんな字を習ったよ。お母さん、この字知っている。僕知っているよ。教えて上げよう」と、目を輝かせどうやらこうやらお友達に追付くことが出来たようです。(以下略)

かなばかりで書かれていた文章題をやっていたこの子が、石井学級へ転入して、いきなりやらされた問題は、

春男君は、色紙を十四枚持っていました。妹に八枚やりました。残りは何枚でしょう。

自動車に男の子が十三人、女の子が六人乗っています。皆で何人乗っているのでしょうか。

というような問題だったのです。これでは、全く取付く島もなかったと思います。「家に帰っても泣いていました」とありましたが、学校でも問題が読めなくて泣いていたのです。教師としても、この時ほどつらい思いをすることはありません。しかし、これほど差のある場合でも、驚くほど早く、いつも追付いているのです。こういう転校生を毎年、何人か受入れてきましたが、このひどい差に長く悩まされたことは一度もありませんでした。こういう特殊の場に置かれると、一年生でも、ひと月に二、三百の漢字が読みこなせるだけの能力は持っているように思われます。

コラム 部首

莫

莫で、草原の草の中に日が沈んだところを表したもので、“タぐれ”が本義。日が隠れて見えないので“ない”の意味にも。

【墓】 人生のくれ、終着所の土、つまり“おほか”。

【募】 “タぐれの力め”。タぐれになると放牧の家畜を呼び集めるのが仕事。“呼び集める”こと。

【暮】 莫が“タぐれ”の本義を失ったので「日」をつけて“タぐれ”。

漢字の学校差など、転校の際、全く問題にはならないことを、私は経験を通して、断言したいと思います。

【慕】 “タぐれの心”。タぐれになると物悲しくなるから、
“したわしい”気持を
“タぐれの心”で表現。